

---

令和4年度 島根県立矢上高等学校  
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」 活動報告書

おおなん協育プロジェクト  
～邑南町総がかり！協働で育む“協育”カリキュラムの開発～

---



島根県立矢上高等学校

## 目次

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 3年間の事業終了と新たな進化のはじまり                | 2  |
| 1. 本事業の概要                          | 3  |
| 1.1 研究開発概要                         |    |
| 1.2 目的・目標                          |    |
| 1.3 育みたい地域人材像 「ふるさとを思い 地域の未来をつくる人」 |    |
| 2. 研究組織体制                          | 4  |
| 2.1 矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）       |    |
| 2.2 矢上高校魅力化推進センター                  |    |
| 2.3 運営指導委員会                        |    |
| 2.4 カリキュラム開発等専門家                   |    |
| 3. 令和4年度活動報告                       | 9  |
| 3.1 総合的な探究の時間                      |    |
| 3.2 学校設定教科「起業探究」                   |    |
| 3.3 教科横断プログラム                      |    |
| 3.4 生徒の変容（魅力化評価システムより）             |    |
| 4. 令和4年度イベント開催報告                   | 23 |
| 4.1 地域未来探究発表会／令和4年12月20日（火）        |    |
| 4.2 未来フォーラム／令和5年1月27日（金）           |    |
| 4.3 文部科学省事業シンポジウム／令和5年1月27日（金）     |    |
| 5. 今後の協育カリキュラム（案）                  | 31 |
| 5.1 協育カリキュラム概要                     |    |
| 5.2 総合的な探究の時間のあり方                  |    |
| 5.3 学校設定教科「起業探究」のあり方               |    |
| 5.4 地域での学びのあり方                     |    |
| 6. 残された課題と今後の方針                    | 44 |
| 6.1 教科横断の模索                        |    |
| 6.2 高大連携の推進                        |    |
| 6.3 自走体制の構築                        |    |
| 6.4 校内体制の再構築                       |    |
| 6.5 関係者からのメッセージ                    |    |
| 7. 報道記録                            | 52 |
| 7.1 新聞等掲載                          |    |

### 3年間の事業終了と新たな進化のはじまり

島根県立矢上高等学校 校長 駒川 一彦

本校普通科において地域課題に注目した探究活動に取り組み始めたのは平成25年度からでした。その際には私も企画・運営のスタッフとして関わりましたが、町の方と協力しながら手探りの状態で、ほぼ生徒の力のみに頼る形で始めた記憶があります。それから数えて令和4年度に丁度10年目を迎えました。私は今回4年ぶりに矢上高校に復帰し、普通科、産業技術科の課題研究の発表会を見ましたが、両科共に、地域との連携など研究内容を含めかなり進化していると感じました。

そして、令和2年度から始まった本事業が今年度最終年を迎えました。本事業を通して本校の学校魅力化そして探究活動を含めた地域との連携について改めて見直す機会にもなり、節目である10年目に事業終了できたことは大変意義深いことだと感じています。

高校魅力化事業や地域との連携事業などの取り組みは、年数が経てばマンネリ化や事業への停滞感が出てくるものだと思います。しかし、本校では「矢上高校魅力化推進センター」を中心に毎年見直しを行い、成果や課題を踏まえてよりよい方向に改善が成されてきました。また、令和3年3月に「矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）」が発足し、地域住民や企業・団体、研究機関とのつながりを深める体制ができたことも活動に大きな効果をもたらしつつあります。そして、令和2年度からの本事業は次の5年、10年に向かうための大きなカンフル剤となっていると感じました。

昨年度末、課題として示されていたことは、「誰もが『地域探究活動』に取り組めるよう、組織的な推進体制の整備」ということでした。これは本事業に取り組む以前からの課題でした。探究担当以外の先生の関わりが薄いという課題は他の学校でも同じではないかと思えます。昨年度の協育パートナーの導入は大きな進化でした。今年は担任・副担任の関わりを強くお願いし、協育パートナーと先生の協働体制が進みました。しかし、一方でどの様に生徒に関わったらよいのかなど、悩みや不安を抱える先生から声も多く寄せられました。私もそうでしたが、先生も「やるからには良いものにしたい」という思いや責任感が重圧になっていると思います。しかし、本事業の成果を広く皆さまに知っていただくための文科省事業シンポジウムを開催した際、岩本 悠 島根県教育魅力化特命官から「探究の本質は、『結果を出さなければならない』ではない。試行錯誤をする過程が資質・能力を身につけさせていく。『先生だからちゃんとしなさいといけない』のではない。」と話された言葉が印象的でした。また、島根県教委教育指導課の馬庭企画幹からも「総合的な探究の時間が、頑張らないといけない授業にはなってほしくない。生徒と一緒に楽しもうという感じで・・・。」とコメントがあり、力んで臨むのではなく、生徒と一緒に試行錯誤を楽しみながら関わっていくことが重要なのだと少し気が楽になりました。今後、先生に安心して関わってもらえるマニュアルづくりやさらなる体制の改善は必要です。取り組みとしてはまだまだですが、着実に成果や課題が見え、次への進化と深化につなげることができた3年間となりました。

最後になりますが、本事業推進にあたり、大分大学大学院教育研究科教授 清國 祐二 先生、島根県教育委員会、邑南町をはじめとする様々な機関・企業・団体・協育パートナーの皆様のご支援ご協力に感謝いたします。この事業の成果と共に課題の部分も含めて「レガシー」として今後につなげ、試行錯誤を続け悩みながらも矢上高校と地域との協働がますます進化し発展していくよう取り組んでいく所存です。今後ともご指導ご助言を賜りますようお願い申し上げます。

## 1. 本事業の概要

### 1.1 研究開発概要

#### “おおなん協育プロジェクト～邑南町総がかり！協働で育む“協育”カリキュラムの開発～”

本校普通科において、地域人材を育成するためには、地域に飛び込み、地域住民と関わる中で課題を見つけ、多様な人々と協働し、教科や地域の歴史や文化といった様々な知恵を結集させ、課題解決を実践するカリキュラムを作ることが重要である。令和2年度はコロナ禍で当初予定の地域協働活動が行えなかったが、カリキュラム・教材開発や体制の整備を図り、実施の準備が整った。さらに、本事業コンソーシアムを包含する「矢上高校と地域の未来をつくる会(コンソーシアム)」を令和3年3月に設立した。令和3年度は、令和2年度の振り返りに基づき、開発した教材や整備した体制を検証する期間としてコロナ禍ではあったものの地域と協働した取り組みを行い、島根県立大学や邑南町との協議を継続して実施し、矢上高校での“協育”カリキュラムを整備し直した。

最終年度である令和4年度は、2年間のカリキュラムの確立とともに、本校の課題である、教科横断のための手立てや校内での取組体制を強化し、地域と学校が持続可能な協働活動ができる仕組みづくりに着手する。具体的には、次の4点に取り組む。

- I：総合的な探究の時間のモデル化
- II：教科横断の土台の構築
- III：地域とともにある学校設定教科『起業探究』の確立
- IV：自走体制の構築

### 1.2 目的・目標

本校のある邑南町は、中国山地の山間にある約1万人の町である。高齢化率は43%を超え、2040年消滅可能性都市に挙げられている。本校は邑南町唯一の高校として、これまで地域を支える多くの人材を育成してきたが、町の人口減や高齢化が進む中で、地域を支えるだけでなく、地域の未来を担う人材の育成がさらに求められている。そこで、邑南町民・行政、本校産業技術科・大学等専門機関と協働し、総合的な探究の時間の再構築、教科横断型プログラムや学校設定教科の設置など、地域と生徒が協働で課題解決できるよう普通科のカリキュラムを整備し、地域の未来を担う人材を輩出することを本構想の目的とする。

### 1.3 育みたい地域人材像 「ふるさとを思い 地域の未来をつくる人」

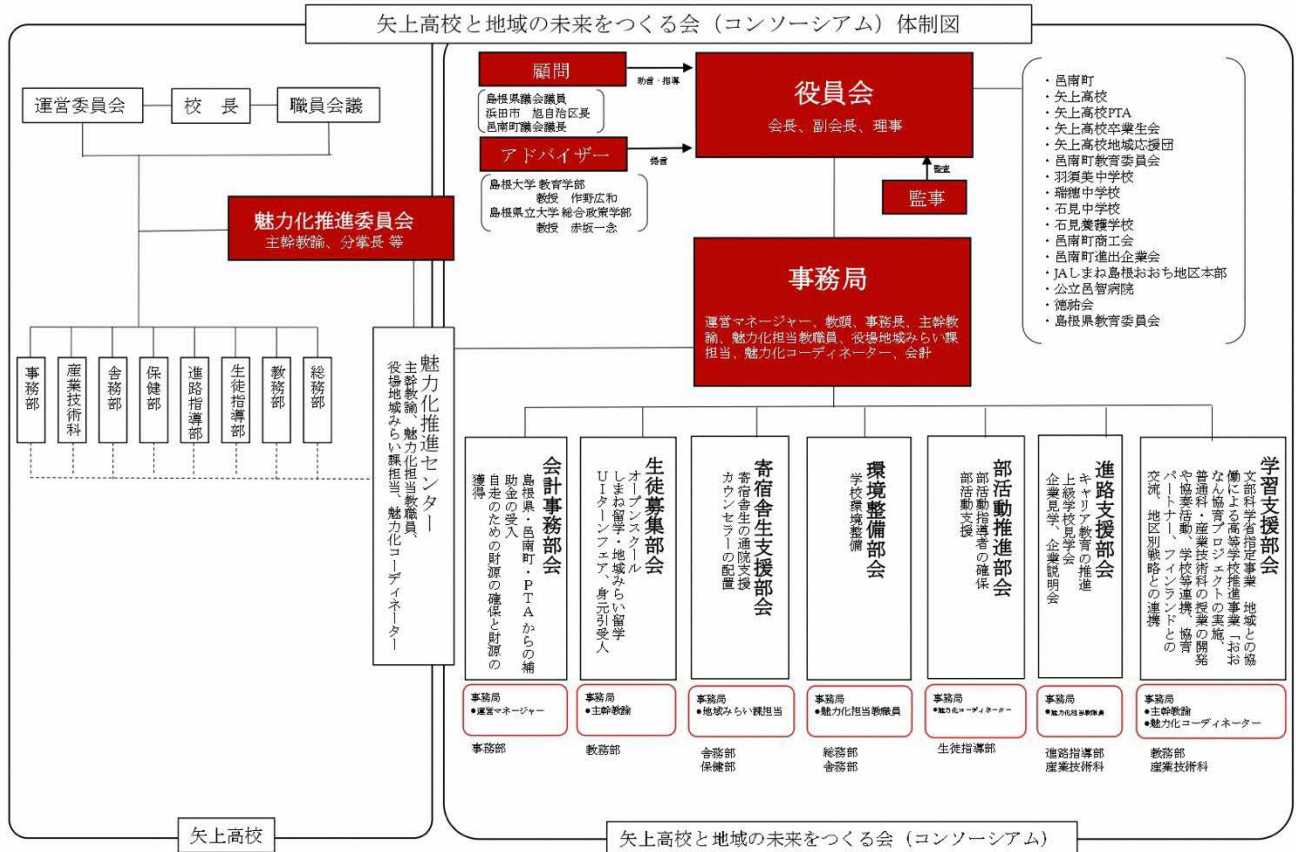
育みたい地域人材は、「ふるさとを思い 地域の未来をつくる人」である。邑南町で就職や起業することにより、地域の発展に貢献する人であり、邑南町外にいてもふるさとへの愛着を忘れず、関係人口として地域を支える人であり、そのどちらも邑南町を持続可能な町として、未来を作っていく人である。

《資質・能力》は次のとおりである。

- 1：目標達成や課題解決の基盤となる学力や技能
- 2：地域の魅力や課題を発見し、目標達成や課題解決方法を探究する力
- 3：主体的かつ他者と協働する力

## 2. 研究組織体制

### 2.1 矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）（令和4年度）



#### 役員

|                      |                           |
|----------------------|---------------------------|
| 石橋 良治（邑南町長）          | 樽田 真治（邑南町立石見中学校 校長）       |
| 辰田 直久（矢上高校卒業生会 会長）   | 小泉 賢咲（邑南町商工会 副会長）         |
| 駒川 一彦（矢上高校 校長）       | 井上 正行（邑南町進出企業会 会長）        |
| 寺本 英仁（矢上高校 PTA 会長）   | 小泉 篤（矢上高校地域応援団 委員長）       |
| 大橋 覚（邑南町教育委員会教育長）    | 服部 幸信（JAしまね島根おおち地区本部 本部長） |
| 中村 厚子（石見養護学校 校長）     | 日高 武英（公立邑智病院 副院長・事務部長）    |
| 竹下 和宏（邑南町立羽須美中学校 校長） | 三上 巖信（徳祐会 理事長）            |
| 永岡 靖（邑南町立瑞穂中学校 校長）   | 馬庭 寿美代（島根県教育委員会教育指導課 企画幹） |

#### 監査

|                |               |
|----------------|---------------|
| 森脇 義博（邑南町監査委員） | 瀧田 均（邑南町監査委員） |
|----------------|---------------|

#### 顧問

|                   |                       |
|-------------------|-----------------------|
| 福井 竜夫（島根県議会議員）    | アドバイザー                |
| 西川 修二（浜田市役所 旭支所長） | 作野 広和（島根大学教育学部教授）     |
| 石橋 純二（邑南町議会議長）    | 赤坂 一念（島根県立大学総合政策学部教授） |



| 事務局              |                         |
|------------------|-------------------------|
| 山岡 二三男 (矢上高校教頭)  | 田村 哲 (邑南町地域みらい課 課長)     |
| 吉田 健一 (矢上高校事務長)  | 田村 成生 (邑南町地域みらい課)       |
| 清水 峰子 (矢上高校主幹教諭) | 白石 絢也 (コンソーシアム運営マネージャー) |
| 柳楽 弘道 (矢上高校 教諭)  | 清水 裕梨 (矢上高校魅力化コーディネーター) |
| 郷田 菜摘 (矢上高校 教諭)  | 小林 圭介 (矢上高校魅力化コーディネーター) |

矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）は、令和3年3月に設立した体制である。中長期ビジョンである『第2期矢上高校将来ビジョン』に則り活動計画を策定、予算執行を行う組織として、本事業の舵取りを行なった。



## 2.2 矢上高校魅力化推進センター（令和4年度）

| メンバー             |                         |
|------------------|-------------------------|
| 清水 峰子 (矢上高校主幹教諭) | 田村 成生 (邑南町地域みらい課)       |
| 柳楽 弘道 (矢上高校教諭)   | 清水 裕梨 (矢上高校魅力化コーディネーター) |
| 郷田 菜摘 (矢上高校教諭)   | 小林 圭介 (矢上高校魅力化コーディネーター) |

矢上高校魅力化推進センターは、矢上高校の魅力化事業開始当初に校内に設置・分掌化された高校教職員・役場担当者・コーディネーターからなる組織である。コンソーシアムの事務局にもメンバーがいることから、本事業を超えた地域との協働（例えば他学科への波及など）を実施しているところである。コンソーシアムの事業計画の原案作成や総合的な探究の時間、ボランティアへの対応などを受け付けている。

## 2.3 運営指導委員会

| 運営指導委員 |                           |
|--------|---------------------------|
| 清國 祐二  | (大分大学大学院教育学研究科教授)         |
| 馬庭 寿美代 | (島根県教育委員会 教育指導課 企画幹)      |
| 白石 絢也  | (矢上高校と地域の未来をつくる会運営マネージャー) |
| 日高 輝和  | (邑南町副町長)                  |
| 事務局    |                           |
| 駒川 一彦  | (矢上高校 校長)                 |
| 清水 峰子  | (矢上高校主幹教諭)                |
| 郷田 菜摘  | (矢上高校 教諭)                 |
| 小林 圭介  | (矢上高校魅力化コーディネーター)         |

本事業運営指導委員会は、本校に関係のある方に依頼した。清國祐二氏は、毎年邑南町教育委員会が主催する「おおなんドリーム学びのつどい」という小・中・高・養合同の発表会にて講評を勤められており、本町の教育事情に明るい。また、昨年度までは、独立行政法人教職員支援機構のセンター長であったため、学校教育や社会教育の連携について深い見識をお持ちである。今後も、未来フォーラムやコンソーシアム、校内研修などで関係を深めたい。

### ■第1回運営指導委員会

|      |   |
|------|---|
| ○実施日 | 6月24日(金)  |
| ○会場  | 矢上高校応接室   |
| ○内容  | 1 事業のねらい説明<br>2 今年度計画と予算について<br>3 その他   |
| ○委員  | 清國 祐二 (大分大学大学院教育学研究科教授)<br>馬庭 寿美代 (島根県教育委員会 教育指導課 企画幹)<br>白石 絢也 (矢上高校と地域の未来をつくる会運営マネージャー)<br>田村 哲 (邑南町地域みらい課 課長) *代役 (日高 輝和 (邑南町副町長)) |
| ○事務局 | 駒川 一彦 (矢上高校 校長)<br>山岡 二三男 (矢上高校 教頭)<br>清水 峰子 (矢上高校 主幹教諭)<br>田村 成生 (邑南町地域みらい課)<br>郷田 菜摘 (矢上高校 探究担当教員)<br>小林 圭介 (矢上高校 魅力化コーディネーター)      |



■第2回運営指導委員会 \*地域未来探究発表会への参加及び講評とする。

○実施日 12月20日(火)

○会場 田所公民館

○委員 馬庭 寿美代(島根県教育委員会 教育指導課 企画幹)

白石 絢也(矢上高校と地域の未来をつくる会運営マネージャー)

日高 輝和(邑南町副町長)



■第3回運営指導委員会 \*未来フォーラム・文部科学省事業シンポジウムへの参加及び講評とする。

○実施日 1月27日(金)

○会場 邑南町健康センター元気館

○委員 清國 祐二(大分大学大学院教育学研究科教授)

馬庭 寿美代(島根県教育委員会 教育指導課 企画幹)

白石 絢也(矢上高校と地域の未来をつくる会運営マネージャー)





## 2.4 カリキュラム開発等専門家

| 分類          | 氏名    | 所属・職       | 雇用形態 |
|-------------|-------|------------|------|
| カリキュラム開発専門家 | 作野 広和 | 島根大学教育学部教授 | 非常勤  |

カリキュラム開発専門家は、本校の魅力化推進やコンソーシアムのアドバイザーとして関わり、邑南町で研究を行う島根大学作野広和教授に依頼した。

### ■教員研修

- 実施日 5月13日（金）
- 内 容 探究学習及び教科と総合的な探究の時間の往還
- 講 師 作野 広和（島根大学教育学部教授）



### 3. 令和4年度活動報告

#### 3.1 総合的な探究の時間

##### 3.1.1 概要

3年間通じて、アリストテレスの「人間は社会的動物である」を探究し、人間にとって社会とは何かを考える時間である。新型コロナウイルス感染症等、人間同士の繋がりが切れつつある中で、公私のバランスや人と人との関わりを考え、社会の中での自分の役割は何か、これからの社会の中で自分の役割は何か、自分にとって地域社会とは何かを考えることが目的である。

**前提：アリストテレス「人間は社会的動物である。」しかし、今、その社会が崩れ始めている。**

本質的な問い

地域社会における自己の役割とは何か。  
人間は（地域）社会からどのような影響を受けるのだろうか。  
逆に人間は、（地域）社会にどのような影響を与えるのだろうか。

この問いに自分なりに回答を出せるために、3年間の教育活動がある

今の地域社会

- (1年) 今の地域社会を担っている人たちはどのような思いなのかそれを聞いて、自分はどのような役割を担えると思ったか。
- (2年) 今の地域社会に関わってみて、自分はどのような人間だと気づいたか。今後、自分はどのような人間になりたいと考えたか。

未来の地域社会

- (3年) 自分が、地域社会の未来を担うとしたら、どのような役割を果たしたいか

| 学年 | 本質的な問い                 | 主な内容   | 詳細                    |
|----|------------------------|--|-----------------------|
| 1年 | 地域社会における自分の役割とは何か      | インタビューを通して地域で活躍する人の地域への思いを教えてもらう。            | インタビュー活動              |
|    |                        | 地域を知る活動を通し、地域の魅力や課題を自分の視点から理解する。             | 鹿島建設プログラム<br>プチ探究活動   |
|    |                        | 地域の取り組みを知り、課題解決案を考え、提言する。                    | プチ探究活動                |
| 2年 | 今の地域社会における自分の果たす役割とは何か | チームを作り、自分達が探究したいテーマや取り組みを考える。                | ワークショップ、フィールドワーク      |
|    |                        | 課題解決に取り組み、検証、新たな問いを立てる。                      | フィールドワーク<br>スライド作成、発表 |
|    |                        | 自分達の取り組みを振り返り、進路と結びつける。                      | 振り返り、志望理由書            |
| 3年 | 地域社会の未来における自分の         | 総合<br>町の未来を作る町内企業でのインターンを通じ、地域の未来を作る思いを理解する。 | レポート作成<br>インターンシップ    |

|  |           |                                   |                 |
|--|-----------|-----------------------------------|-----------------|
|  | 果たす役割とは何か | 町の未来と自分の未来についてのレポートを作成し、次世代へ継承する。 | 鹿島建設プログラムレポート作成 |
|  | 探究        | これからの社会と自分の未来についてのレポートを作成する。      | レポート作成          |
|  |           | 3年間の振り返りと今後の生き方についてまとめる。          | 振り返りシート         |

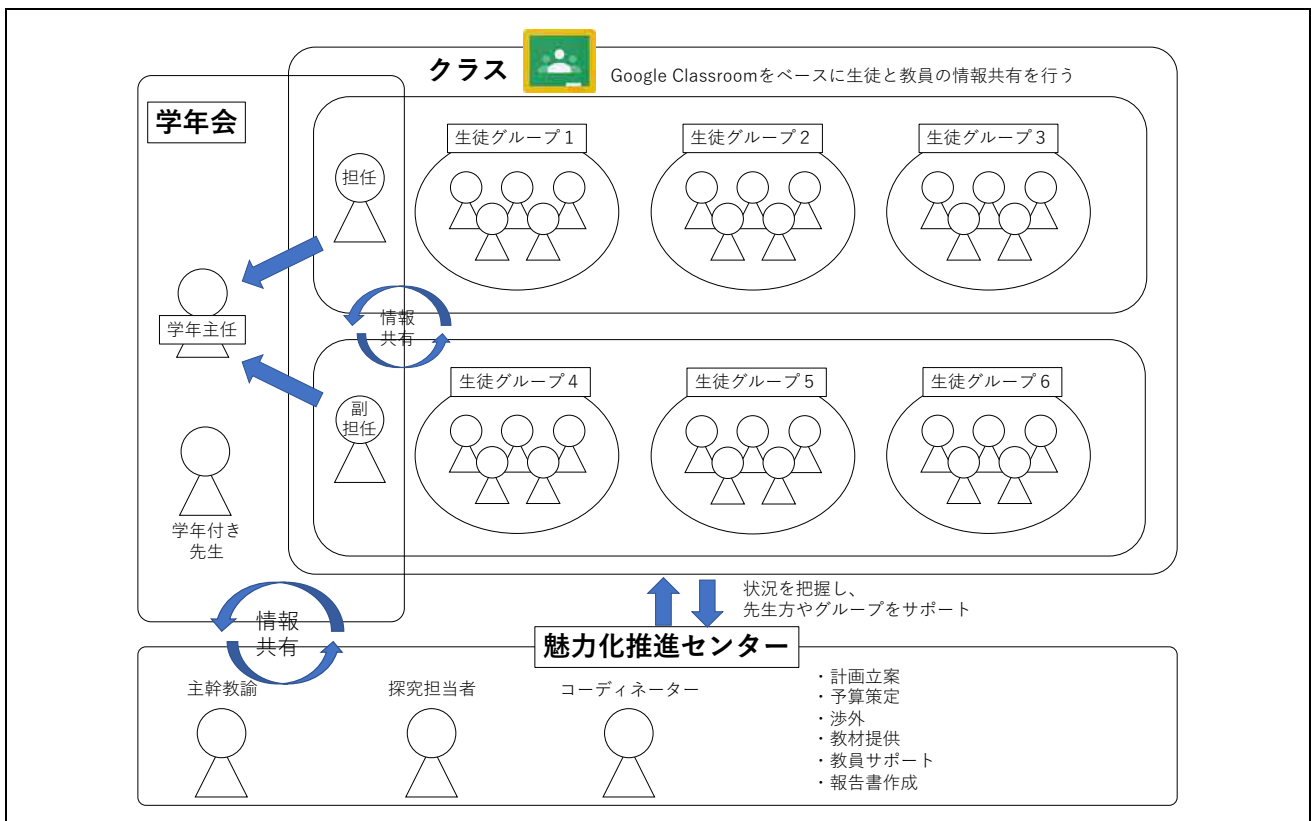
### 3.1.2 実施体制

#### (1) 基本体制

基本的な実施体制は次のとおりである。

| 主な活動  | 主体                             | 役割                                   |
|-------|--------------------------------|--------------------------------------|
| 事務局   | 魅力化推進センター（主幹教諭、探究担当者、コーディネーター） | 計画策定、教材準備、渉外（地域人材）、経費管理、報告書作成、伴走サポート |
| 実践、伴走 | 学年会                            | 授業実施、伴走、進捗管理、成果物内容確認                 |
| 地域伴走  | 協育（きょういく）パートナー                 | 生徒の地域活動の伴走、フィールドワーク等対応               |

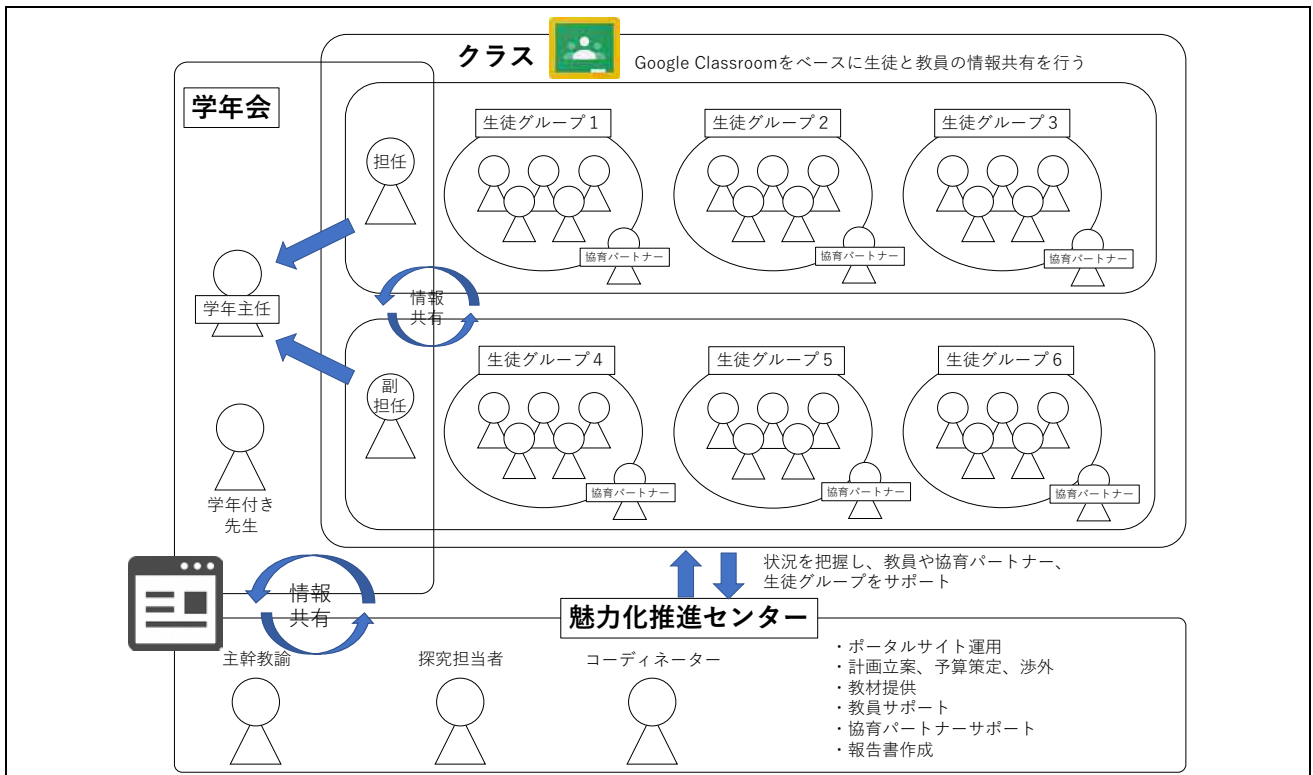
#### (2) 1年生・3年生の実施体制



基本的には、生徒の活動が中心であるが、一斉授業が必要なものは動画等を上映するか、事前に課題として視聴するようにする。ハンドブックに従って授業が展開されるが、必要に応じてスライドを使って補足する。

| 担当        | 役割   | 具体的なアクション   |
|-----------|--|---|
| 担任／副担任    | 担当クラスのグループを2分割（6グループなら3グループずつ）し、そのグループの状況を把握する。              | <ul style="list-style-type: none"> <li>一斉授業のサポート</li> <li>グループ巡視、伴走</li> <li>学年主任報連相</li> <li>成果物の内容チェック</li> </ul> |
| 学年主任      | 担任／副担任と、各グループの状況を確認する。魅力化推進センターと情報共有を行う。                     | <ul style="list-style-type: none"> <li>スケジュール調整</li> <li>成果物の内容チェック</li> </ul>                                      |
| 魅力化推進センター | 総合的な探究の時間の計画等を作る。ポータルサイト等を通じて、各グループの状況を把握し、学年会を通じて、適切な対応を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>教員が出張等で対応できないグループへの伴走</li> <li>教材作成、提供</li> </ul>                            |

### (3) 2年生の実施体制



2年生は、魅力化推進センターが認定した協育パートナーに各グループ伴走してもらい、地域との協働活動を推進する。進捗状況を把握することや探究の質を向上させるため、探究ポータルサイトや探究チャートなどのツールを使い、学びを可視化する。

| 担当     | 役割   | 具体的なアクション   |
|--------|--|---|
| 担任／副担任 | 担当クラスのグループを2分割（6グループなら3グループずつ）し、そのグループの状況を把握する。各グループの協育パートナーとの情報共有を密に行なっていただく。 | <ul style="list-style-type: none"> <li>一斉授業のサポート</li> <li>グループ巡視、伴走</li> <li>協育パートナー報連相</li> <li>学年主任報連相</li> </ul> |

|           |  |   |
|-----------|--|---|
|           |  | ・ 成果物の内容チェック  |
| 協育パートナー   | 各グループの伴走を行う。   | ・ グループでの伴走<br>・ 実践の協働<br>・ 担任／副担任報連相<br>・ ポータルサイトへ入力  |
| 学年主任      | 担任／副担任と、各グループの状況を確認する。魅力化推進センターと情報共有を行う。                         | ・ スケジュール調整<br>・ 成果物の内容チェック  |
| 魅力化推進センター | 総合的な探究の時間の計画等を作る。<br>ポータルサイト等を通じて、各グループの状況を把握し、学年会を通じて、適切な対応を行う。 | ・ ポータルサイトの更新<br>・ 協育パートナーへの連絡<br>・ 教員が出張等で対応できないグループへの伴走等<br>・ 担任／副担任と協育パートナーとの顔合わせの機会、研修の機会の創出 |

#### (4) 協育パートナー

令和3年度から本格稼働した制度。地域の方々と、生徒たちの活動に伴走していただけるように依頼した。特定の個人の場合もあるが、団体としてパートナーになっていただき、都合のつく人に関わっていただいた。

#### ■R4年度協育パートナー

| 団体名        | 地域やテーマ   | 過去の取組            |
|------------|----------|------------------|
| 日貫地区別戦略    | 日貫地区     | 日貫一揖等を活用、紙漉き     |
| 出羽桜成会      | 出羽地区     | 空き家対策            |
| 矢上公民館      | 矢上地区     | 中高生の勉強会、デイキャンプ   |
| 井原公民館      | 井原地区     | スマホ教室、インスタ       |
| 地域団体たかはらんど | 高原地区     | おこわおにぎり商品化、お祭り出店 |
| 石見工業株式会社   | 建設、工業    | 校内ポスター展示         |
| 島根県住みます芸人  | エンタメ、お笑い | 神楽・お笑いイベント       |
| 有限会社ディブロ   | 食（石見ポーク） | レトルトカレー、フードロス    |
| 邑南町社会福祉協議会 | 福祉       | 米のお菓子試作          |
| コンソーシアム    | 起業、商品化   | ***              |
| ビレッジプライド邑南 | 食（スイーツ）  | 産業技術科、スイーツ甲子園指導  |
| 邑南町地域みらい課  | エネルギー    | ***              |

#### <協育パートナー選定基準>

- ・ 地域活動に関わっている（地区別戦略事業、公民館、自治会、地域団体）かどうか
- ・ 地域の課題に直結する取り組みをおこなっている（企業・団体）かどうか
- ・ 過去実績や生徒との関わりがあるかどうか



### 3.1.3 準備したツール

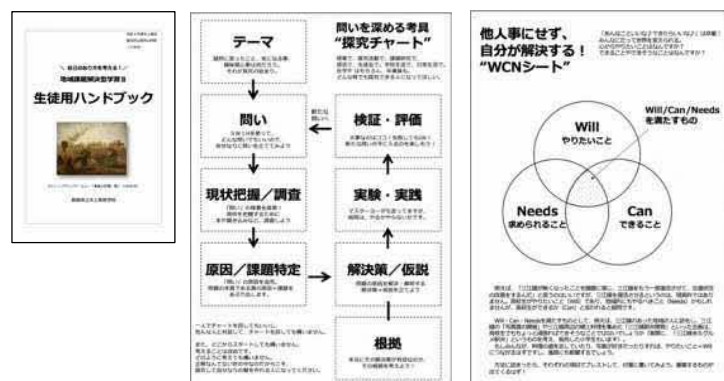
これまで地域探究では、各授業でワークシートを配布し探究を進める形式をとった。しかし、探究は本来授業を待つ必要はなく、探究したい時に探究できる体制があることが重要だと認識を改め、ハンドブックという形で生徒に配布した。また、Google Classroom を活用し、協育パートナーとの連絡や動画の発信を行なっている。さらに、ポータルサイトを作成し、過去の取り組み、授業の動画、参考文献などを掲載した。

| 名称               | 内容   | 備考  |
|------------------|--|---|
| 探究ポータルサイト        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ Google アカウントを用いる。</li> <li>・ 一斉授業の動画等を配信する。</li> <li>・ 参考文献や地域の状況などを随時更新する</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 協育パートナーと教員の情報共有のために使用</li> <li>・ 生徒は閲覧のみできるように権限を付与する</li> </ul> |
| 伴走用ハンドブック        | 伴走に必要な情報が掲載されている。2種類の伴走を使い分けることその他、生徒の探究ハンドブックの内容も掲載。  | 協育パートナー、担任／副担任、学年主任に配布  |
| 探究ハンドブック         | 探究活動に必要な情報が掲載されている。スライドの作り方やプレゼンのやり方などの一斉授業の内容も掲載。   | 生徒それぞれに配布<br>(学年ごとに異なる内容)   |
| 探究チャート           | 探究のサイクルが一目でわかるもの。思考プロセスが可視化されているので、伴走の際に生徒と確認しながら、調査が足りないなどの現状を把握できる。  | 生徒それぞれに配布   |
| Google Classroom | ワークシートやスライドを共有する。  | 教員と生徒の情報共有のため   |

#### ▼探究ポータルサイト



#### ▼探究ハンドブック、探究チャートなど



### 3.1.4 地域探究テーマ

|    | 発表タイトル                                | 概要  |
|----|---------------------------------------|---|
| 1  | 三江線・宇都井盛り上げ隊                          | 私たちは宇都井を活性化させようと INAKA イルミのボランティアに参加しました。他にも INAKA イルミのために募金を行いました。また Instagram を使用し、活動内容を投稿しています。                      |
| 2  | 郷土の食文化を広げよう                           | 邑南町は現在人口減少、少子高齢化だけではなく、郷土料理も廃れていっている現状があります。そこで邑南町の郷土料理である「角寿司」に注目し、地域の経済も回せるのではないかと思い、日々活動をしています。                      |
| 3  | 肉嫌い克服大作戦                              | 私たちの班には肉嫌いの友達がありました。食べないのはもったいないと思い、肉嫌いでも食べたいようになるように調理してみました。結果はおいしいと言ってもらえることができました。今後は他の肉嫌いの人から多角的な視点で意見をもらっていきたいです。 |
| 4  | 日貫の活性化を目指して《スイーツで日貫を盛り上げる》            | スイーツで日貫の活性化を目指し、盛り上げるための活動を行いました。「日貫一日」と協力し、カフェ「一揖」で日貫の特産品を使ったスイーツを販売するために試作を重ねています。今後は日貫で作ったスイーツを一揖以外のお店で販売してもらおうことです。 |
| 5  | beauty and welfare<br>～幅広い世代に美容を届けよう～ | 幅広い年代の方に美容を届けるために、美容の商品について三瓶の方にお話を聞いたり、自分たちで試作を重ねたりしました。今後商品を作り、病院や高齢者施設に配布したいと考えています。                                 |
| 6  | 明るい町を目指して                             | 邑南町内にある空き家を活用し、空き家を減らしていく活動の計画を立てています。空き家を活用してコワーキングスペースを作り、明るい町を目指して活動をしています。  |
| 7  | 地域の予防医学を考える                           | メンバー全員が医療に興味を持つことから、地域の予防医学を考えました。そこで私たちは様々な病気を予防することのできる運動に目を向け、ウォーキングイベントやオリジナル体操を行い、地域の予防医学を高めようとしています。              |
| 8  | 我ら超黄金芋兄弟～芋の力で出羽を救え～                   | 私たちの班では、出羽地域の課題解決のために出羽地域で採れる食材を使って商品化することをテーマに活動しています。今回はサツマイモと玄米を使ってクッキーとパンを販売しました。これからも行事やお祭りなどで販売していきたいです。          |
| 9  | 〇〇〇〇で町おこし!?                           | 私たちのグループは、〇〇〇〇を使って地域を活性化させることを目標に、地域の方と交流をしてイベントなどに参加しました。最終的には自分たちでイベントを開けたらいいなと思っています。                                |
| 10 | 脱炭素化した町の未来                            | 私たちは邑南町が「脱炭素先行地域」に選定されていることを知りました。そこで、脱炭素先行地域に選定されていること、脱炭素化した町がどうなるかを知ってもらうため、最近注目されているメタバースを使いながら活動をしています。            |

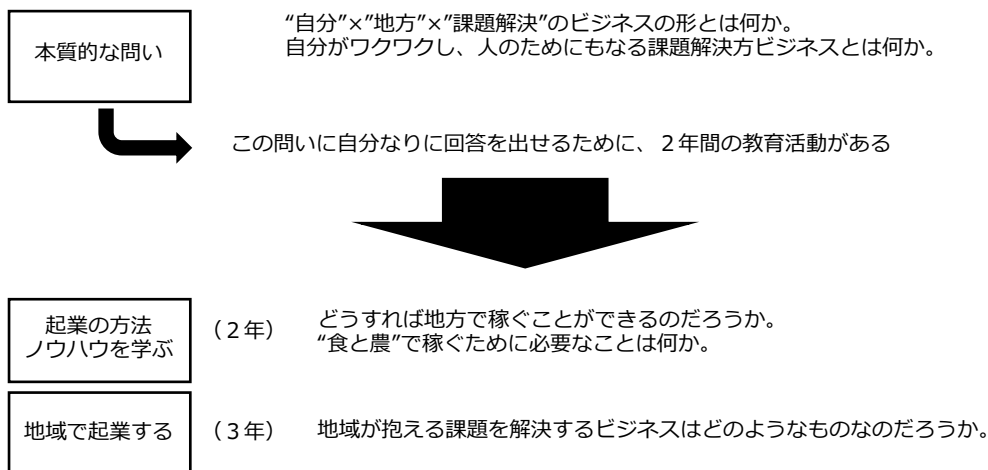




## 3.2 学校設定教科「起業探究」

### 3.2.1 概要

**前提：「地方にはチャンスがない」と思われている。  
地方だからこそ起業できる人を増やし、地域課題の解決とビジネスを両立できる人を増やしたい。**



2年間通じて、地域の課題を解決する、自分なりのビジネスとは何かを考える時間である。東京よりも地方の方が、ビジネスチャンスは多い。しかし、「起業」の最初の一步はなかなか踏み出しにくい。2年次は、邑南町のA級グルメの町づくりや矢上高校の産業技術科の良さを活かし、「食と農」=6次産業、食品加工を中心にした商品開発、販売をチームで経験する。これは、一般的に稼ぎにくいと思われている食と農の分野でも稼ぐことができるノウハウを獲得するもので、これから地方で起業する際の一つの手段になりうるからだ。

本質的な問いを考える上でのヒントとなる自身の回答を、各学年で問いを設定する。

- ・2年生：「どうすれば地方で稼ぐことができるのだろうか。“食と農”で稼ぐために必要なことは何か。」
- ・3年生：「地域が抱える課題を解決するビジネスとはどのようなものだろうか」

### 3.2.2 起業探究Ⅰ：2年生カリキュラム

#### (1) 学習の到達目標（探究テーマ）

|                                |  |
|--------------------------------|--|
| 本質的な問い                         | 「どうすれば地方で稼ぐことができるのだろうか。“食と農”で稼ぐために必要なことは何か。」 |
| 【1学期】食と農のビジネスプランを作る            |  |
| 【2学期】食と農のビジネスを展開する             |  |
| 【3学期】食と農のビジネスを振り返り、自分のビジネスを考える |  |

#### (2) 評価基準・評価方法

|     | 知識・技能  | 思考・判断・表現  | 学習態度   |
|-----|--|---|--|
| 内容  | ビジネスプランの実践を通じ、ビジネスや課題解決に必要な知識及び技能を身につけ、課題解決に関わる概念を形成し、起業の意義や価値を理解している。 | 実社会や実生活、地域の資源（ヒト・モノ・カネ・情報・時間・知的財産）と自己の関わりから地域の課題を見出し、ビジネスプランとしてまとめ表現し、実践することができる。 | 主体的に食と農を中心とした起業探究に取り組み、他者の思いや良さを活かし、新たな価値を創造し、より良い社会の実現と自己の目標達成に向けて行動しようとする態度を身につけている。 |
| 成果物 | レポート   | ビジネスプラン   | グループワーク、ビジネスプラン発表、販売での様子   |

#### (3) 学習の計画

| 月  | 学習内容         | ねらい・学習活動           |
|----|--------------|--------------------|
| 4  | オリエンテーション    | ねらいや目的、ルールなどを伝える   |
| 5  | さつまいもの植え付け   | さつまいもの植え付けを行う      |
| 6  | 衛生管理、商品試作    | 商品試作を行う            |
| 7  | ビジネスプラン発表    | ビジネスプランを完成させる      |
| 9  | 商品開発、ビジネスプラン | 販売する商品を確定させる       |
| 10 | 収穫、商品開発      | さつまいもを収穫し、商品等を考える  |
| 11 | 仕入れ、販売準備、実施  | 仕入れ、販売準備・販売を行う     |
| 12 | 売り上げの確認      | 残った材料を使った商品開発      |
| 1  | 観光プランの制作     | 経済効果を生み出す観光プランを考える |
| 2  | 観光プランの制作     | しおりの作成             |
| 3  | 観光プランのプレゼン   | 観光協会等にプレゼンを行う      |



### 3.2.3 起業探究Ⅱ：3年生のカリキュラム

#### (1) 学習の到達目標（探究テーマ）

|  |                                 |
|--|---------------------------------|
| 本質的な問い   | 「地域が抱える課題を解決するビジネスとはどのようなものだろう」 |
| 【1学期】  | 地域の抱える本質的な課題を理解し、ビジネスプランを作る     |
| 【2学期】  | 考えたビジネスプランを実践する                 |
| 学年末課題：「2年間の経験を踏まえ、地域社会の課題解決のためのビジネスプランを考え、発表せよ」<br>考えたプランを、2年生や地域の方に事業継承を図る。 |                                 |

#### (2) 評価基準・評価方法

|     | 知識・技能  | 思考・判断・表現  | 学習態度   |
|-----|--|---|--|
| 内容  | ビジネスプランの実践を通じ、ビジネスや課題解決に必要な知識及び技能を身につけ、課題解決に関わる概念を形成し、起業の意義や価値を理解している。 | 実社会や実生活、地域の資源（ヒト・モノ・カネ・情報・時間・知的財産）と自己の関わりから地域の課題を見出し、ビジネスプランとしてまとめ表現し、実践することができている。 | 主体的に地域の課題解決のための起業探究に取り組み、他者の思いや良さを活かし、新たな価値を創造し、より良い社会の実現と自己の目標達成に向けて行動しようとする態度を身につけている。 |
| 成果物 | プレゼンテーション資料  | ビジネスプランの内容  | グループワークでの様子、ビジネスプラン発表  |

#### (3) 学習の計画

| 月  | 学習内容         | ねらい・学習活動                     |
|----|--------------|------------------------------|
| 4  | チームビルディング    | ねらいや目的などを伝える チームを作り、事業内容を決める |
| 5  | ユーザーインタビュー   | 地域の人たちの抱える課題を、インタビューを通して理解する |
| 6  | ユーザーモニター（試作） | 試作品をユーザーに使ってもらう              |
| 7  | ビジネスプラン作成    | ビジネスプランを作成する                 |
| 9  | ユーザーモニター（試作） | 修正試作品をユーザーに使ってもらう            |
| 10 | 実践           | 地域の多くの人たちに使ってもらう             |
| 11 | 実践           | 〃                            |
| 12 | プレゼン作成       | 継承したい事業内容を資料にまとめる            |



### 3.3 教科横断型プログラム

#### 3.3.1 概要

この2年間、コンテンツ・ベースでの教科横断型授業を数回試行した。教材が整ってはいるものの、カリキュラムとして根付いたものではなく、特別授業という非日常的な教科横断となり、教科横断について根本から考え直す必要に迫られた。

本校では、学期に一度公開授業週間が設けられ、互見授業の機会は用意されている。しかし、そもそもお互いの教科で何を学んでいるか知らない状況であり、まずは教員同士が話し合う場を作る必要があった。

#### 3.3.2 プチ教員研修

カリキュラム開発専門家から、「1時間の教員研修よりも短時間の研修を何度も実施した方が良い」とのアドバイスを受け、職員会議後の「15分プチ研修」を定例化した。

##### (1) プチ教員研修内容・教員研修内容

| 日程        | 内容                                    |
|-----------|---------------------------------------|
| 4/15 (金)  | ICT活用研修：飯南町立頓原中学校 コーディネーター梶川光男氏 (60分) |
| 5/13 (金)  | 教科と総合の往還：島根大学教育学部作野広和教授 (90分)         |
| 6/8 (水)   | 「総合的な探究の時間」での伴走方法について                 |
| 7/13 (水)  | 先進校訪問報告                               |
| 8/19 (金)  | スクールロイヤー (弁護士講話)：島根県弁護士会に依頼 (60分)     |
| 9/14 (水)  | 魅力化評価システムの結果報告                        |
| 10/19 (水) | 観点別学習評価 (1学期振り返り)                     |
| 1/6 (金)   | スクールタクトの使い方、学習評価の実際 (書道)              |
| 1/30 (月)  | ICT活用動画紹介                             |

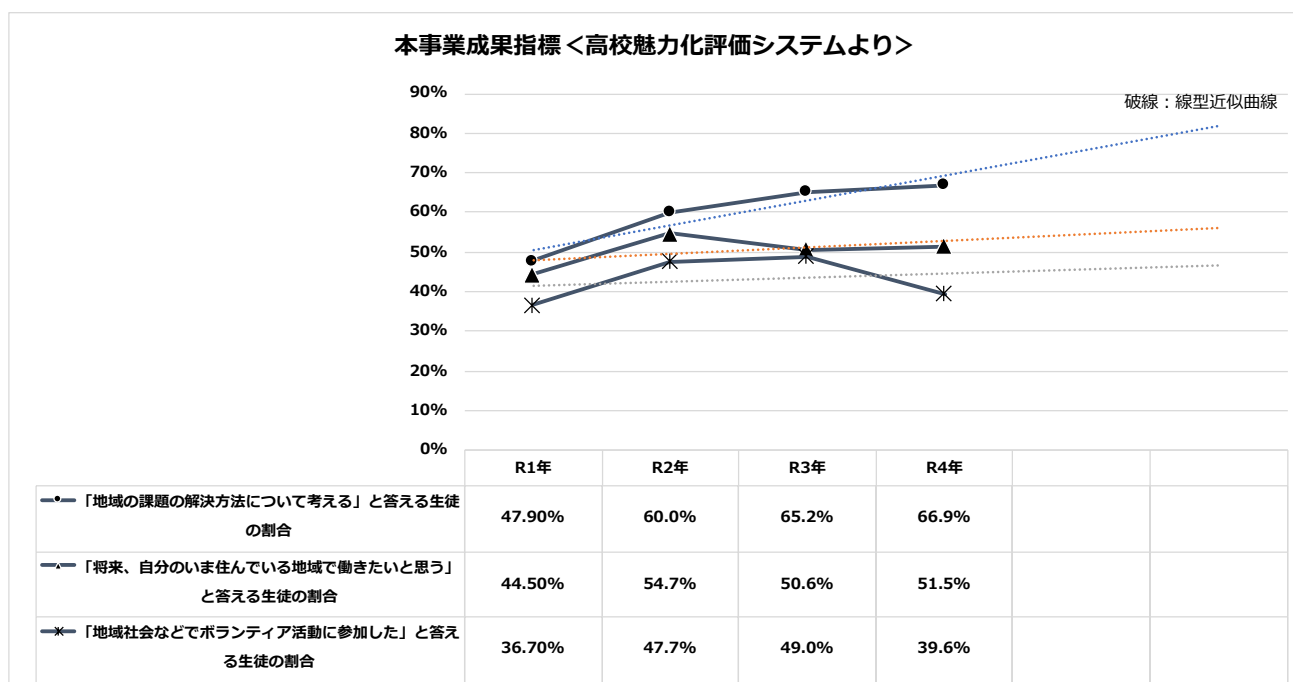
##### (2) プチ教員研修の効果

各教科と総合的な探究の時間の連携を図る教員が現れた。英語表現 (English Communication) や国語 (話す・書く・聞く) など、総合的な探究の時間の内容を普段の授業に活かそうとする場面が見られた。また、教科横断型授業ではないが、プチ研修の後に教員同士で研修内容について話し合う姿を多々見受けられた。

勤務時間内に1時間、2時間の教員研修を行う余裕がなかった本校だが、短時間で知見を共有することで多少なりとも教科横断の土台に貢献できたのではないかと考える。

### 3.4 生徒の変容

#### 3.4.1 魅力化評価システム



実施：毎年6月

対象：全校生徒（普通科だけでなく産業技術科含む）

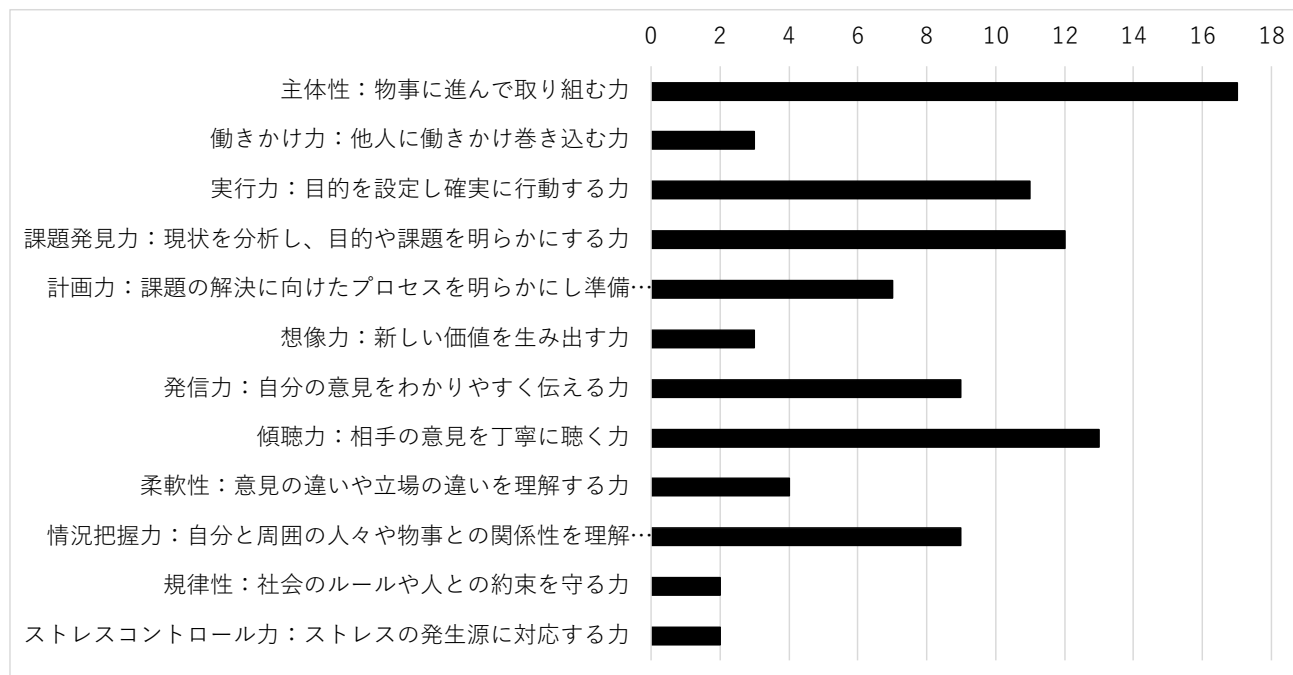
本事業の成果指標の線形近似曲線は右肩上がりであるため、本事業（協育カリキュラム）による影響は、普通科だけでなく他学科への影響が生じていることがわかる。

特に、「地域の課題の解決方法について考える」と答える生徒の割合は年々増加しており、令和3年から65%を超える数値となっている。しかし、「将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う」と答える生徒の割合は半数を超えるが、安定していない。生徒の出身地によるところが大きいのが、地域での探究活動と進路についての連携に課題が残る。また、学校設定教科「起業探究」の効果が出ず、内容の刷新が必要だ。

「地域社会などでボランティア活動に参加した」と答える生徒の割合は事業開始の前年度と事業終了時はあまり変わらない結果になったが、コロナ禍の影響で休校や町内での活動自粛傾向が強くなったことが原因と考えられる。ただし、生徒がボランティアに参加する流れは明確になっておらず、校内でのボランティアの扱いを明確にする必要がある。

### 3.4.2 当該生徒へのアンケート

○探究学習の活動（5月～12月）を通じて、どのような力が身についたと思いますか（N=27）



(生徒の意見を抜粋)

| 身についたと思う力 | 発揮された場面やそう思う理由   |
|-----------|--|
| ・主体性      | 角寿司を販売すると決め、最後まで諦めず販売しようと思い、何回も色んな人をお願いしたり、宣伝させてもらったりして販売することが、できたこと。            |
| ・計画力      | 課題(目的)を達成するためにチームのみんなと話し合いや意見交換など必要なものを見つけ達成するための手立てを考えることが出来たと思う。               |
| ・主体性      | 11月の地域のイベントに積極的に参加した。そこで高齢者の方、地域の方などに少しだけインタビューをするために自分から話しかけにいけたし、すべきことを聞きに行けた。 |
| ・柔軟性      | 販売や作業を手伝わせてもらう時に、それぞれの立場や意見、目的が様々で大変だなと思うことが多くあったとき。                             |
| ・柔軟性      | 自分たちの班のメンバーがやりたい事がそれぞれで大分違って、それをお互いに理解して何をするかよく話し合った地域の方と話す時もよく理解しようとした。         |
| ・実行力      | 販売する前日の準備の時、300個程度作ることに、一人一人が役割を分けて手際よく進めることが出来た。                                |
| ・発信力      | チラシやスライドを作るのに人にどうやったら自分達の活動などをよりよく伝わるかを考えて作ることができた。                              |
| ・発信力      | それぞれの考えを出さないと事が進まない、そういう時にしっかり考えを伝えることができたと思う                                    |

生徒の意見では、具体的な場면을挙げて自分に身についた力を挙げている。地域探究によって、今まで経験したことのない場面に出会い、その場面での自分の役割に気づき行動することが成長につながったと考えられる。

#### 3.4.1 令和2年度から令和4年度の協育カリキュラム

総合的な探究の時間における「地域探究」の内容は一定の成果を出したと言える。しかし、進路探究との連携や各教科との連携に課題が残り、また学校設定教科「起業探究」の内容も変化が必要である。

次年度以降、「ふるさとを思い 地域の未来をつくる人」の育成のためには現行「協育カリキュラム」にさらにテコ入れしなければならない。>>> 5. 今後の協育カリキュラム(案) 参照



## 4. 令和4年度イベント開催報告

### 4.1 地域未来探究発表会

- 日時 令和4年12月20日(火) 12:00-15:30
- 会場 田所公民館(オンラインにて視聴可能)
- 講師 日高輝和氏(邑南町副町長) 白石 絢也氏(コンソーシアム運営マネージャー)  
\*いずれも運営指導委員
- 参加者 普通科1年(60名)、普通科2年(60名)、教職員(10名)、その他(30名)
- 日程  
12:00 開会式  
12:10-13:05 | 4チーム発表(各チーム10分発表+3分質疑)  
13:15-13:55 | 3チーム発表(各チーム10分発表+3分質疑)  
14:05-14:45 | 3チーム発表(各チーム10分発表+3分質疑)  
14:55-15:30 | 全体講評
- 発表タイトル

| 順番 | 発表タイトル                             |
|----|------------------------------------|
| 1  | 三江線・宇都井盛り上げ隊                       |
| 2  | 郷土の食文化を広げよう                        |
| 3  | 肉嫌い克服大作戦                           |
| 4  | 日貫の活性化を目指して《スイーツで日貫を盛り上げる》         |
| 5  | beauty and welfare ~幅広い世代に美容を届けよう~ |
| 6  | 明るい町を目指して                          |
| 7  | 地域の予防医学を考える                        |
| 8  | 我ら超黄金芋兄弟~芋の力で出羽を救え~                |
| 9  | 〇〇〇〇で町おこし!?                        |
| 10 | 脱炭素化した町の未来                         |

### ○配布物

| ■プログラム  | ■評価シート  |
|---|---|
| <p>矢上高校<br/>地域未来探究<br/>発表会</p> <p>2022年12月20日(火)<br/>開演 12:00<br/>田所公民館 ホール</p> | <p>令和4年度矢上高校普通科 探究活動のこぼれ</p> <p>◆資料科も、産業資料も、地域も!</p> <p>◆地域の伝統パートナーさんと情報交換!</p> <p>◆地域に出て、調査や実践をしてみよう!</p> <p>◆自分たちが地域に貢献できるアイデアを提案しよう!</p> |



## 4.2 未来フォーラム

- 日 時 令和5年1月27日（金）9:00-12:00
- 会 場 邑南町健康センター元気館（オンラインにて視聴可能）
- 講 師 石橋 良治氏（邑南町町長）、清國 祐二氏（大分大学大学院教育学研究科教授）
- 参加者 普通科・産業技術科1年（95名）、普通科・産業技術科2年（88名）、普通科・産業技術科3年（70名）教職員（30名）、その他（30名）
- 日 程
  - 9:00 開会式
  - 9:15-10:00 | 3チーム発表（各チーム10分発表+5分質疑）
  - 10:10-10:40 | 2チーム発表（各チーム10分発表+5分質疑）
  - 10:55-11:35 | パネルディスカッション「探究ってワクワクする？」
    - ファシリテーター：清國 祐二氏（大分大学大学院教育学研究科教授）
    - パネリスト：白石 絢也（コンソーシアム運営マネージャー）
    - 郷田 菜摘（矢上高校探究担当教員）
    - 服部 羽琉（矢上高校普通科2年）
    - 北村 萌江（矢上高校普通科2年）
    - 日高 知伽（矢上高校産業技術科3年）
    - 小泉 志歩子（矢上高校産業技術科3年）
  - 11:40-11:55 | 講評、審査結果

### ○発表タイトル

|   | 発表タイトル               | 概要  |
|---|----------------------|---|
| 1 | 郷土の食文化を広げよう          | 邑南町は現在人口減少、少子高齢化だけではなく、郷土料理も廃れていっている現状があります。そこで邑南町の郷土料理である「角寿司」に注目し、地域の経済も回せるのではないかと思います、日々活動をしています。                |
| 2 | 第12回全国和牛能力共進会出場を目指して | 第12回全国和牛能力共進会に高校及び農業大学校を対象とした特別区が新設されたことをきっかけに、全国大会出場を目標として取り組みを行いました。石見和牛プロジェクトを活用し、和牛の研修会に参加したり、出品する牛の指導をして頂いたり、良 |

|   |             |  |
|---|-------------|--|
|   |             | い牛とはどのような牛なのかを学ぶことができました。  |
| 3 | 脱炭素化した町の未来  | 私たちは邑南町が「脱炭素先行地域」に選定されていることを知りました。そこで、脱炭素先行地域に選定されていること、脱炭素化した町がどうなるかを知ってもらうため、最近注目されているメタバースを使いながら活動をしています。       |
| 4 | 花の魅力        | 普段見ている花のさらなる魅力を発見し、多くの方に花へ興味を持って欲しいと考えました。そこで私たちはキャンドルなどの加工品を制作し産業祭で展示を行いました。アンケートをとり、花の魅力をより伝えるにはどうしたらよいか調査をしました。 |
| 5 | 地域の予防医学を考える | メンバー全員が医療に興味を持つことから、地域の予防医学を考えました。そこで私たちは様々な病気を予防することのできる運動に目を向け、ウォーキングイベントやオリジナル体操を行い、地域の予防医学を高めようとしています。         |



#### 4.3 文部科学省事業シンポジウム

- 日 時 令和5年1月27日(金) 13:00-15:30
- 会 場 邑南町健康センター元気館 (オンラインにて視聴可能)



○参加者 本校教諭（20名）、他高校教員（20名）、オンライン（15名）

○日 程

13:30 開会式

13:40-14:20 | 矢上高校しくじりパネル「しくじり」から考える持続可能な探究のカタチ」

ファシリテーター：岩本 悠氏（島根県教育魅力化特命官）

パネリスト：馬庭 寿美代（島根県教育委員会教育指導課企画幹／運営指導委員）

清水 峰子（矢上高校主幹教諭）

郷田 菜摘（矢上高校探究担当教員）

森田 仁（矢上高校普通科2年1組担任）

小林 圭介（矢上高校コーディネーター／地域協働学習実施支援員）

14:40-15:30 | ワールドカフェ「持続可能な探究の運営や体制はどのような形だろう？」

15:30-15:45 | フリートークセッション、小括（岩本 悠氏）

15:45-16:00 | 全体講評（清國 祐二氏）、閉会式

○矢上高校しくじりパネル「しくじり」から考える持続可能な探究のカタチ」



○ワールドカフェ「持続可能な探究の運営や体制はどのような形だろう？」

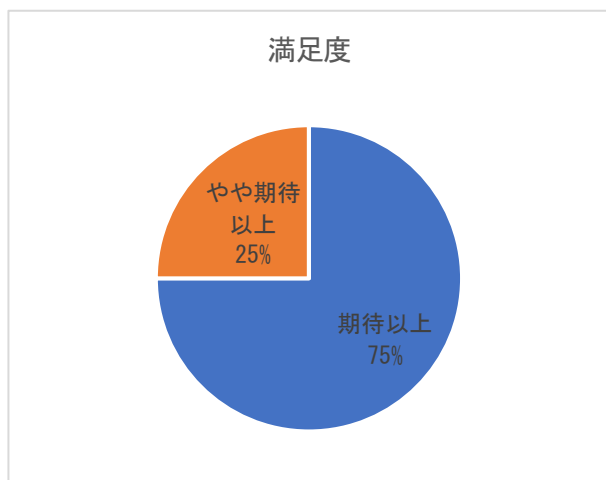


○小括 島根県教育魅力化特命官 岩本 悠氏

○全体講評 運営指導委員 清國 祐二氏

○アンケート結果 (N=20)

(1) 満足度を教えてください。



オンラインでも生徒の生の発表が聞けた。またそれに至るリアルなしくじりも聞けた。自校での取り組みの足がかりになりそうなことがたくさん得られた。

雪で現地に行けなかったのが残念すぎましたが、オンライン参加で急遽ここまで対応していただいたことに感謝です。

矢上高校の先生方・CNさんが包み隠さずいろんな話をしてくださり、色々な角度からお話が聞けたので気づきが沢山ありました。

話が深まる構成でありがたかったです。

ざっくばらんに本音の部分の聞いた気がしてよかったですと思います。

探究活動にはいろいろと課題がある中で、ヒト、時間など様々な視点で他県や他校の情報が聞けたこと。

ワールドカフェを初めて体験しましたがとても良かったです。

リアルな話が聞けてよかった 様々な立場の方の話が聞けた

明日からの仕事に役立つことばかりだった。

直接お話しできる機会があったこと。

各校の取り組みなどを聞いてとても有意義な会であった。

普通の「悩み」を前向きに対話することができ、大変楽しい時間でした。

探究の持つ力を分かることができた。本当は生徒の本気になる姿に触れたいと思っていることが分かった。

島根県の取り組みや他県の取り組みを詳しく聞かせて頂き、大変勉強になりました。

しくじりを共有することを皮切りに、肩の力を抜いた本音でのトークができたように思います。ポジティブな話し合いになったことも印象的でした。

同じような取り組みをしている学校さんと直に話げできた。生徒さんの話も聞ける素晴らしい機会でした。

ワールドカフェにより自分の思いが明確化した。



島根の司書から実践報告を聞いたことはあるのですが、先生側の視点でも聞いてみたかったので、し  
くじりから学ぶという発想が面白くてよかったです。ただ、オンラインでは先生が少なかったので、  
リアル会場の意見のまとめも少し聞いてみたかったです。

フォーラム全体の企画・アイデアがとても良かった。どうすれば参加者の参考になるかをよく考えて  
いた。

(2) 今回のシンポジウムで、自校・他地域の取り組み状況について新たに気づいたことや、今後  
さらに取り組みたいことがあれば記入してください。

探究は自由にゆるく・・・が良いが、評価などいったん同じ目線でできると学びが深くなる。評価ルー  
ブリックは最低限の探究の質を保障する指針であり、活動全体を通じて生徒に提示して行くと良い。

探究活動について、各校の先生方が探究をしつづけておられることがわかりました。何のための探  
究なのか、先生と生徒さんとで協議してみるのも面白いかなと思いました！

探究学習をするにあたって、多くの先生方が課題にしておられる体制面を、自分でももっと探究して  
みたいと思いました。地域の方や学生さんなど、いろいろな方を巻き込んでいけると学校の先生が抱え  
て大変なことは無くなるのかなと考えてみたり。そういう仕組みづくりができるといいと思いまし  
た。

どんな探究のあり方がいいのかモヤモヤを頂きました。 ・教員の教材編集力を大切にする ・生徒を  
未知に導くのがいいのか？→打率は高い、先生の準備は大変 ・生徒と未知を楽しむ方がいいの  
か？プロセス、過程を大切にする→失敗や停滞を楽しむ？ どんな役割を探せばいいのだろう？ 先生  
...教材に変えていく、学びの見とりにかえて、学びのポイントの見定め、視点の投げ込み

コーディネーターの役割であったり、コーディネーターを中心に行うことが総探にとって大きな割合  
(有意義にするために)になると再認識しました。

自分ができることは限られているが、まず失敗も含めて自己開示をしていくことから取り組んでいき  
たい。

探究活動をさらに盛り上げたい。

探究を楽しむ、もっと自由に探究を！というフレーズが印象的でした。

探究は楽しいとわかりました。

校内の仕組みづくりを充実させたいと思いました。

協育パートナーなど本校にはない取り組みでとても参考になった。本校でも取り入れられる仕組みを  
考えていきたい。

地域の人材を上手く活用することが重要であると感じました。

本校の特徴を生かすことが一番大切。生徒を本気にさせたい。これからは探究力がカギ！

コーディネーターとの向き合い方を学校として全体で考えていかなければならないと感じました。

島根大学進学予定の生徒の話聞いて、島根にいても学ぶテーマによって、その世界の中心にも入れ  
るし、島根にいるから外の世界にも繋がることができると感じました。

学年、学科を解いた総探に関心あり。負担はあるもののおもしろそう。

みんな仕組み作りは悩みどころだということがわかりました。個人的には図書館との連携がどうなっ  
てるのか具体的に聞けばよかったなと思っています。

探究を進めていく上で、サポート体制の重要性が浮き彫りとなったように感じた。地域によって異なると考えるが、企業等がそこにどう絡んでいくかがポイントになるのではないかと感じた。

## ○配布プログラム

文科省事業シンポジウム

# 矢上高校 しくじり探究セミナー

1/27  
13:00-15:30  
(Fri)

こがなこせ、したらいけん、だんたわ

於：創研センター元浜部

●プログラム●

12:30-13:00 開場/スタンドシート記入  
13:00 閉会式  
13:00-13:50 矢上高校しくじりパネル  
・ファシリテーター 若木 聡 島根県教育魅力化特命官  
・パネリスト 馬原 美代 企画幹/清水 輝子 主幹教諭  
 郷田 菜摘 探究担当教諭/森田 真由 教諭/小林 圭介 CN

14:00-14:50 ワールドカフェで考える「持続可能な探究のあり方とは？」  
14:50-15:10 フリートークセッション  
15:10-15:20 全体講評 清國 祐二 大分大学大学院教育科学研究科教授  
15:30 閉会式

主催：矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）

### おおなん協育プロジェクト 島南町総がかり！協働で育む“協育”カリキュラムの開発

目的 「ふるさとを思い、地域の未来をつくる人」の育成  
研究内容 地域に「職」をもち、地域住民と関わりの中で課題を見つけ、多様な人々と協働し、教科や地域の歴史や文化といったさまざまな知恵を結集させ、課題解決を実現するカリキュラムを開発し、地域人材を育成・輩出する。

事業の概要

“ふるさとを思い、地域の未来をつくる人”を育成するために…

総合的な探究の時間

教科連携

協育体制の整備  
(コンソーシアム)

協育カリキュラムの開発

これら3つのつなぎ

この2つが事業の目的

**事業採択前**

- 推進委員会を11月に開催
- 総合探究実践活動期間を9月～10月（4ヶ月、10時間程度）
- 校内4人体制
  - 担任2人、CN1人
- 外との連携
  - 必要に応じて都県調整

**R4年度**

- 教材の制作、思考ツールの厳選
  - 探究シート、WCNシートで思考の見える化
  - 協育パートナーと生徒チームでプレゼンし合うワークショップの開催
    - 生徒と地域のテーマが合致すると良いが、合致しない場合も無し！
- 校内4人体制
  - 学年主任1人、担任2人、副担任2人、主幹教諭1人、CN1人
- 外との連携
  - 協育パートナー制度の継続
    - 協育チームのGoogle Classroomへ移行

**R2年度**

- 推進委員会の発表会を12月に開催
- 総合探究実践活動期間5月～12月
- 校内4人体制
  - 担任2人、主幹教諭1人、CN1人
- テーマに関する地域の方に得意依頼
- コンテンツベースの教科連携PG（2種）作成
- 学校設定教科「起業探究」コンセプト等作成

**R3年度**

- 教材の制作、思考ツールの厳選
- 協育パートナーと生徒チームのマッチング
  - 地域での実証の場が限られる
  - 授業のコマだけ終わらず、土日に実践
- 校内4人体制
  - 担任2人、主幹教諭1人、CN1人
- 外との連携
  - 協育パートナー制度/地域の方に依頼

● コンテンツベースの教科連携PG（5種）作成…

● 学校設定教科「起業探究1」授業スタート

### よくわかる「専門用語」の解説

**●協育パートナー**

協育パートナーは、地域の中で、学校と一緒に活動する生徒を育成して欲しいとお願ひした人材です（国志の外部協働者のような立ち位置）。ここでは「地域に「職」を持つ方」と認識した上で協働して活動していただくことを目指しています。名前を知らない方との関係性が、地域への影響が大きいのではないかと考えました。

- 人数：10～12名（チーム数によって変動）
- 所属：社会科、経営系、地域団体職員、地域にこし協力隊、公民館主宰など
- 地域で活動している方にお誘ひしています。

**●コンテンツベースの教科連携PG**

さまざまな教科同士、重複する単元内容があることから、重複する単元内容の「導入」や「発展」の場面で、特別授業を招き、各教科で学んだ知識を応用する場面を設定しました。

（仮対話：コンテンツベース）

<制作したコンテンツベースの教科連携PG>

- 食生活科 | 保健体育・家庭・公民・生物
- 労働問題 | 保健体育・家庭・公民
- 住居と環境の関係 | 家庭・総合的な探究の時間
- 文化の探究 | 家庭・家庭
- パワポットビジュアル | 保健体育・家庭
- カーボンニュートラル | 家庭・公民

●今年度アットアップ発行し、Google Classroomを利用していただきました。

**●学校設定教科「起業探究」**

文科省事業では、学校設定教科を設置することが期待されています。その中で、商業科の選択授業の中で、商業科が設置されていたこともあり、その科目を学校設定教科に変更しました。

起業探究は、商売の課題をビジネスによって解決するという観点と、生き生きと活動する自分自身で活動し、生き生きと活動できる生徒を輩出したいという思いで設置しました。

令和3年度、4年次選修授業として、ことごとく試作した教材を使っていたが、令和4年からは普通科総合コースは必須となるため、教材の追加改訂が必要です。

**●探究シート、WCNシート：思考ツール**

思考力が身に付いていることを判断するために、思考が形になるように心がけています。探究シートは、既製のフレームを用いましたが、生徒を見るとき、自分自身で、生徒は自分自身を考えた、次に何を考えるかを知りたいという「動的」なフレームを模索して、ことごとく、中央大学附属中学校、協育プロジェクトで、「探究マップ（Light）」を参考に、探究シート（探究）を作成しました。

（WCNシート（探究）は、Will・Can・Needsの語文字をとり、自分の進路や課題解決を考えた際に使ってもらっています。

●総合的な探究の時間（探究シート等）や起業探究の教材サンプルは長本欄にあります。

### 矢上高校しくじりパネル

ファシリテーター 若木 聡 島根県教育魅力化特命官  
パネリスト 馬原 美代 企画幹/清水 輝子 主幹教諭  
郷田 菜摘 探究担当教諭/森田 真由 教諭/小林 圭介 CN

資料は随時こちらまで！

- 1 【地域との連携】  
地域と生徒がつながるの  
はいいけれど…
- 2 【テーマ設定】  
生徒の主体性と  
地域のニーズや課題は  
一致する？  
継続してどこまで必要？
- 3 【校内体制】  
「みんなできる」って、  
どうすれば…？
- 4 【評定】  
どこにある？  
やる気スイッチ  
でして回る時間的制約…
- 5 【探究活動への関わり】  
一緒に探究したらダメ？  
引継ぎってどうなの？  
何をどう教えるべき？
- 6

## ワールドカフェ

### “持続可能な探究の在り方”とは？

▶▶▶ 単独の教師は限りではなく、どうやってその教育を実現し達成するか。  
■ ■ ■ 足りない、だから増やせ！ (足して倍々) ではなく、「足りない、だけどうする？」を考えたい。

#### 【ワールドカフェの進め方】



■グループの中で話しながら、模造紙に書きましょう！

別のテーブルから来た方が、どんな議論をしたかわからないので、話しながら書くことを推奨しています！

【MEMO】



Shimane Prefectural Yatsuzaki High School  
島根県立矢上高等学校

〒694-0128 島根県松江市赤松町2-2-201  
TEL: 0855-951105 [www.yakami.ed.jp](http://www.yakami.ed.jp)



## 5. 今後の協育カリキュラム（案）

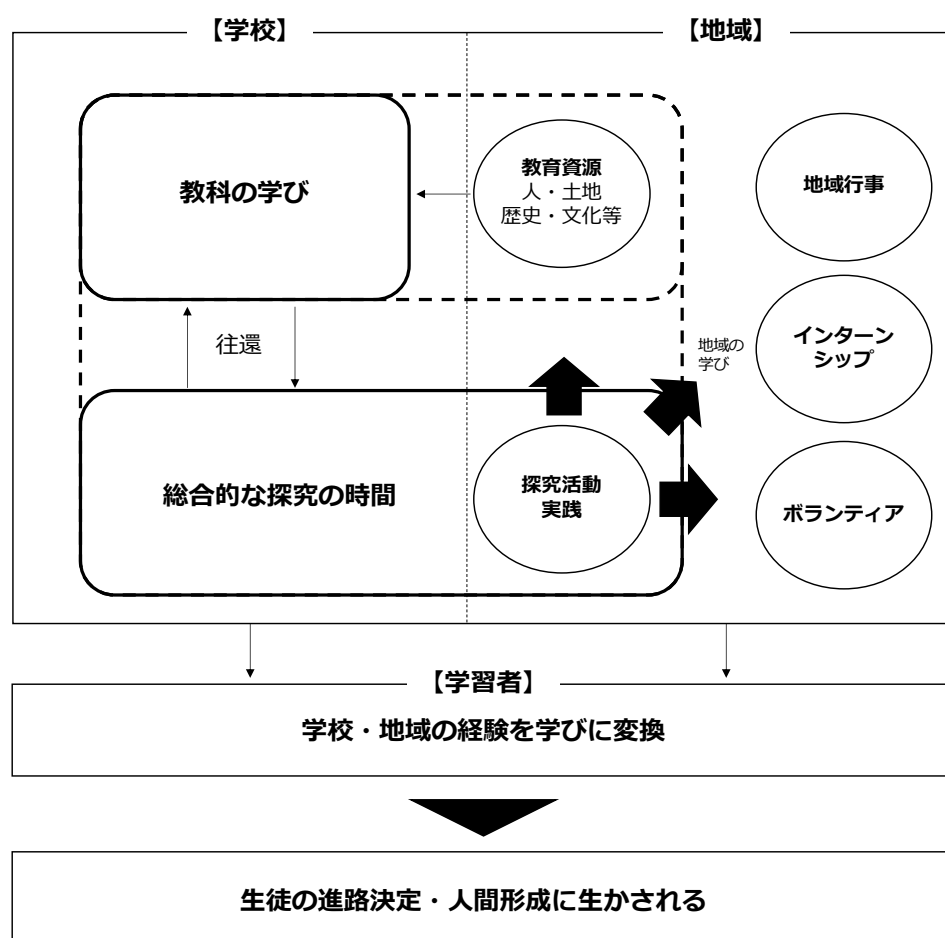
### 5.1 協育カリキュラム（案）概要

3年間の事業によって明らかになったのは、「教育課程内のカリキュラム」だけでは生徒の学びにとって限界があるということである。地域の中で生徒が学ぶ場が作られることも重要だ。

しかし最も重要なのは、各種の経験を学びに変換するということである。学習者が経験の振り返りを行う仕組みや振り返り等をうながす機会やツールを整備することも生徒の学びを生み出すために必要だ。

### ■協育カリキュラムのグランドデザイン（案）

全ては生徒の学びのために。生徒の学びは、学校だけではなく、地域にも、そして学習者自身の中にもある。



<協育カリキュラムグランドデザインを構築するための手立て>

- 教育課程内のカリキュラムを設計すること・・・学校ができること
  - ・総合的な探究の時間などのカリキュラムを再構築すること
  - ・教科の学びの中に、地域の教育資源を取り入れること（教科と地域がつながる）
  - ・総合的な探究の時間と教科の学びが関わり合うこと（教科と総合探究がつながる）
- 地域の中にも教育機会が形成されること・・・地域ができること
- 学校と地域で培った各自の経験を学びに変換すること・・・学習者に求められること

## 5.2 総合的な探究の時間のあり方

### 5.2.1 カリキュラム構成の考え方

進路探究と地域探究を交互に実施することで、生徒の頭の中で、地域と進路がつながることを目標としたい。また、進路については、思考→実践、実践による反応→思考の循環によって、進路の実現可能性が高まると考えられる。

### 5.2.2 実施体制

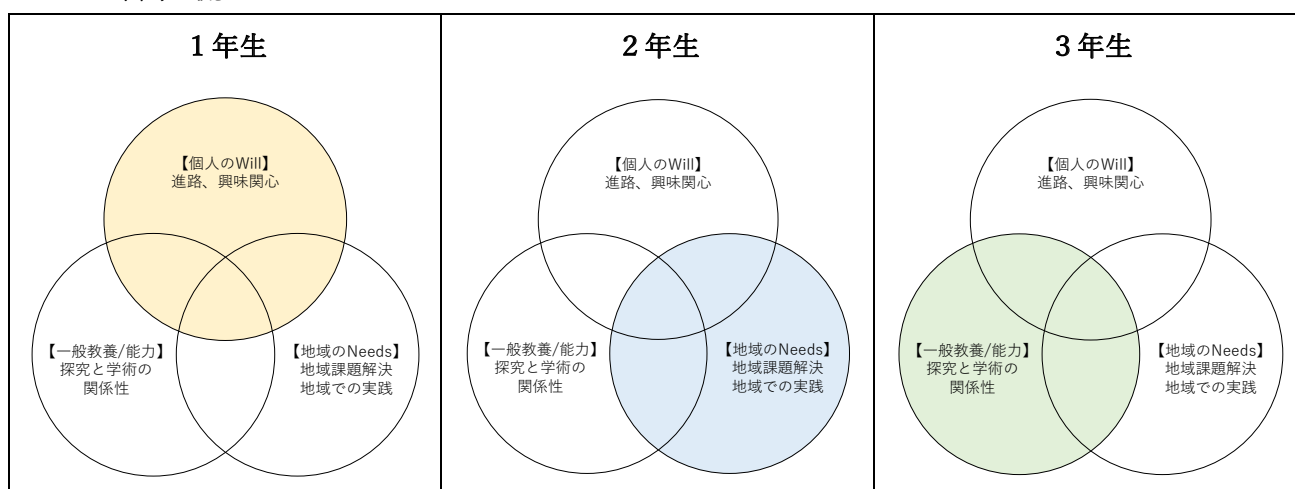
| 役割      | 担当                                     |
|---------|--|
| 方向性作成   | 魅力化センター（主幹教諭、探究担当教員、カリキュラム CN）、コンソーシアム |
| 学年会への周知 | 主幹教諭、探究担当教員、学年主任                       |
| 実施主体    | 担任、副担任、学年付き教員                          |
| 伴走・支援   | 担任、副担任、学年付き教員、協育パートナー、魅力化センター          |
| 教材原案制作  | 探究担当教員、カリキュラム CN                       |

### 5.2.3 ねらい

●「ふるさとを思い 地域の未来をつくる人」としての資質・能力を育成する。

|                  |  |
|------------------|--|
| ・知識・技能           | キャリアデザインや探究プロセスを理解している。  |
| ・思考・判断・表現        | 仮説検証を踏まえた探究活動をすることができる。<br>自分が探究したことを、進路や学術、社会とのつながりや結びつきを考え、活用することができる。 |
| ・人間性<br>学びに向かう姿勢 | 地域や人のために何が出来るかを考え、他者と協力しながらプロジェクトを運営できる                                  |

### 5.2.4 3年間の流れ





|                        |   |  |
|------------------------|---|--|
| 個人の進路希望を明確にできていることが目標。 | 個人の進路希望などにに基づき、地域で実践し、フィードバックを受け、実情に合わせた進路希望が明確になっていることが目標。 | 実地で探究してきたことが、学術世界の中ではどのような位置付けなのかを理解し、社会の中での自分の役割に気づいていることが目標。 |
|------------------------|---|--|

### 5.2.5 各学年のカリキュラム

#### 【カリキュラム（1年生）】

| 学年  | 学期   | 月   | 進路探究[個人]   | 地域探究[チーム]   |
|-----|------|-----|--|---|
| 1年生 | 1学期  | 6月  | ・キャリアデザイン論<br>・職業調査（現状把握）                          |   |
|     |      | 7月  | ・職業調査（地域のニーズ）<br>・ <u>地域との対話：社会が求める人材とは？</u> （注釈1） |   |
|     | 夏季休暇 | 8月  | <オープンキャンパス>  | <ボランティア><br><インターンシップ>                            |
|     | 2学期  | 9月  | ・発表用ルーブリック伝達                                       |   |
|     |      | 10月 | ・発表資料作成  |   |
|     |      | 11月 | ・個人進路校内発表会（学年）                                     |   |
|     |      | 12月 |  | ・進路に基づくチーム編成<br>・ <u>グループワーク（テーマの選択）</u><br>(注釈2) |
|     | 冬季休暇 |     |  |   |
|     | 3学期  | 1月  |  | ・グループワーク（仮説）                                      |
|     |      | 2月  |  | ・2年生へ発表（中・中間発表）                                   |
|     |      | 3月  | ・キャリアデザインと地域探究                                     | ・キャリアデザインと地域探究                                    |

#### （注釈1）地域との対話：社会が求める人材とは？

キャリアデザイン論では、個人の Will（意志）、Can（能力）と、他者からの Needs（必要性）の3点が必要であることを説明する。生徒は職業調査や自身の意志・能力の深掘りを行うだけでなく、本当に他者から必要とされる（ニーズがある）職業の具体化が重要である。地域との対話の中では、多種多様な地域の大人（社長など含む）が、生徒の進路希望について壁打ち相手となり、地域の抱える課題や具体的な進路アドバイスなどを行なってもらうことを期待する。

#### （注釈2）グループワーク（テーマ選択）

1年次の3学期は地域探究を体感する期間として設定する。テーマ設定や問いの立案は初めて探究を行



う際には非常に難しいため、テーマを作るのではなく、選択させる方式を取る。テーマは、各教科と連携できる内容や過去の取り組みの継続性を担保することを目的として次の8つの内容とする。

食、医療・福祉、スポーツ・健康、経済、生活（高齢化、少子化、空き家）、教育、地球規模課題

これらのテーマは、教科単元とのつながりがある内容である。本カリキュラム設定によって、各教科と総合的な探究の時間の往還を促す。

### 【カリキュラム（2年生）】

| 学年  | 学期   | 月   | 進路探究[個人]        | 地域探究[チーム]                             |
|-----|------|-----|-----------------|---------------------------------------|
| 2年生 | 1学期  | 4月  |                 | ・地域探究論、チーム分け                          |
|     |      | 5月  |                 | ・仮説思考、PJのタネ                           |
|     |      | 6月  |                 | ・ <u>学年／地域の学び合いワークショップ[コンソ]</u> （注釈3） |
|     |      | 7月  |                 | ・協育パートナーとの対話<br>・大学生との対話              |
|     | 夏季休暇 | 8月  | <オープンキャンパス>     | <ボランティア><br><インターンシップ>                |
|     | 2学期  | 9月  |                 | ・協育パートナーとの対話                          |
|     |      | 10月 |                 | ・地域での実践、スライド作成                        |
|     |      | 11月 |                 | ・研修旅行（中間発表）                           |
|     |      | 12月 |                 | ・地域未来探究発表会                            |
|     | 冬季休暇 |     | （・地域探究で身についたこと） |                                       |
|     | 3学期  | 1月  |                 | ・ <u>振り返り・地域探究と進路の融合</u> （注釈4）        |
|     |      | 2月  |                 | ・1年生へのアドバイス                           |
|     |      | 3月  | ・進路と学術研究の融合     | ・お世話になった人への御礼                         |

#### （注釈3）学年／地域の学び合いワークショップ

令和4年度は、学年（普通科・産業技術科）、地域（協育パートナー）それぞれがプロジェクトのタネをプレゼンし、マッチングを図った。テーマや地域性が合致する場合、有効な手段である一方、協育パートナーのテーマと合わず、関わりが薄くなってしまったチームもあった。

そこで、生徒と地域双方でプレゼンするのではなく、生徒のみでプロジェクトのタネを発表し、その後に地域の中で協育パートナーを選定するというやり方を取る。

#### （注釈4）振り返り・地域探究と進路の融合

令和4年度、探究活動を振り返る場を作ったが、これからも探究活動の経験を学びに変換する場が必要

である。特にチームで探究活動を進めるといふ難しさだけでなく、放課後や土日に自主的に活動する生徒もいるため、教員が個人の活動を見取ることも難しい。経験を学びに変換し、言語化できる時間は今後必要である。

### 【カリキュラム（3年生）】

| 学年  | 学期   | 月   | 進路探究[個人]               | 地域探究[チーム]              |
|-----|------|-----|------------------------|------------------------|
| 3年生 | 1学期  | 4月  | ・キャリアデザインと地域探究         |                        |
|     |      | 5月  | ・新書や新聞記事を輪読（注釈5）       |                        |
|     |      | 6月  | ・新書や新聞記事を輪読            |                        |
|     |      | 7月  | ・個人進路探究まとめ<br>・大学生との対話 |                        |
|     | 夏季休暇 | 8月  | <オープンキャンパス>            | <ボランティア><br><インターンシップ> |
|     | 2学期  | 9月  | ・個人面談                  |                        |
|     |      | 10月 | ・個人面談                  |                        |
|     |      | 11月 | ・個人面談                  |                        |
|     |      | 12月 | ・個人面談                  |                        |
|     | 3学期  | 1月  | ・はばたき講座                |                        |
|     |      | 2月  | ・はばたき講座                |                        |
|     |      | 3月  | --                     | --                     |

#### （注釈5）新書や新聞記事を輪読

令和4年度、生徒には自分の探究活動や進路に基づいた新書を選択し、自身の探究活動と学術的見地をつなぐ活動を行った。休校による時間的制約もあって、2年生ほど密な壁打ちが行えず、各自の振り返りに止まってしまったことを受け、探究チームの中で、新書あるいは新聞記事などを輪読する活動を行い、現代社会に関する知識・理解の獲得を図る。

### 5.3 学校設定教科「起業探究」のあり方

#### 5.3.1 カリキュラム構成の考え方

学校設定教科「起業探究」は、本事業2年目から開始された学校設定教科である。普通科総合コースの選択者のみが受講できる教科だが、令和5年度からは総合コースで必修教科となる（3年生はまだ選択授業）。そのため総合的な探究の時間との連携や地域の企業団体と関わることも可能となる。

#### 5.3.2 実施体制

| 役割     | 担当                                     |
|--------|--|
| 方向性作成  | 魅力化センター（主幹教諭、探究担当教員、カリキュラム CN）、コンソーシアム |
| 実施主体   | 担当教員                                   |
| 教材原案制作 | カリキュラム CN                              |

#### 5.3.3 ねらい

●卒業後に即戦力として活躍できる資質・能力を育成する。

|                  |                               |
|------------------|-------------------------------|
| ・知識・技能           | マーケティングやビジネスを考える上で必要な知識を身につける |
| ・思考・判断・表現        | 課題やニーズを把握し、課題解決案を考え、論理的に説明できる |
| ・人間性<br>学びに向かう姿勢 | 自分のためだけではなく、他者や社会のための起業を考える   |

#### 5.3.4 各学年のカリキュラム

##### 【カリキュラム（2年生）】

令和5年度の起業探究Ⅰは、総合探究のテーマに、「地域経済を回す＝地域の活性化」を加えることとする。また、地域にある企業や団体の取り組みを知ることで、地域経済を理解する機会を作る。さらに、校内プロジェクトとして、「矢高味噌の魅力と課題をもとにした商品開発プロジェクト」を実施することで、生徒が商品開発のスキルを習得することを目標とする。

| 学年  | 学期   | 月  | 起業探究Ⅰ   |
|-----|------|----|---|
| 2年生 | 1学期  | 4月 | ・オリエン→総合探究テーマ＋地域経済を回す（ビジネス）視点<br>・お金についての基礎知識   |
|     |      | 5月 | ・PJのタネのブラッシュアップ<br>・マーケティング基礎（矢高味噌の魅力と課題を知る）    |
|     |      | 6月 | ・町内視察   |
|     |      | 7月 | ・町内視察   |
|     | 夏季休暇 | 8月 | <ボランティア><インターンシップ><br>・ビジネスプラン作成（総合探究のテーマをベースに） |
|     | 2学期  | 9月 | ・ビジネスプラン作成<br>・町内視察→地域のプロジェクトを知る                |

|    |      |                  |                   |
|----|------|------------------|-------------------|
|    |      | 10月              | ・地域での実践<br>・起業家講演 |
|    |      | 11月              | ・地域での実践           |
|    |      | 12月              | ・決算報告             |
|    | 冬季休暇 |                  |                   |
|    | 3学期  | 1月               | ・矢高味噌を使った商品制作     |
|    |      | 2月               | ・起業家講演            |
| 3月 |      | ・矢高味噌を使った商品やPR完成 |                   |

### 【カリキュラム（3年生）】

起業探究Ⅱは、クラスを一つの会社として考え、生徒の中で一人社長を決める。社長を中心に事業内容を決める方針をとる。町内視察では、町の経済活性化のために事業を行っている企業に行き、話をさせていただく。また、大きな柱としては、「町内施設」の魅力向上（売上向上）や地域の課題解決ビジネスを検討する。11月にその提案を行うことを目標とする。町内の新設団体や大学生起業家などに話をしてもらい、起業を身近に感じてもらいたい。

| 学年  | 学期   | 月   | 起業探究Ⅱ   |
|-----|------|-----|---|
| 3年生 | 1学期  | 4月  | ・オリエン、株主総会、取締役選出                                |
|     |      | 5月  | ・町内視察   |
|     |      | 6月  | ・町内施設関係者ヒアリング、フィールドワーク（クライアント情報）                |
|     |      | 7月  | ・起業家講演  |
|     | 夏季休暇 | 8月  | <オープンキャンパス><ボランティア><インターンシップ><br>・ビジネスプラン作成（課題） |
|     | 2学期  | 9月  | ・町内視察、PJ関係者ヒアリング                                |
|     |      | 10月 | ・起業家講演  |
|     |      | 11月 | ・町内施設関係への提案、実践                                  |
|     |      | 12月 | ・決算報告   |
|     | 3学期  | 1月  | ・町の経済を活性化させるビジネスプランの提出                          |
|     |      | 2月  | --  |
|     |      | 3月  | --  |

#### 5.3.5 教材

授業は、ワークシートを活用し、教科書は本校自作のものを利用する。オンライン授業に変わったとしても学びが継続するためには、受講者の利用端末に影響を受けない環境を整える必要がある。そのため、ワークシートや教科書を印刷し、書き進める中で学びが深化し、他へ影響を与える（他教科でも利用できる・地域探究でも利用できる）ものにするべきだと考える。

## 5.4 地域での学びのあり方

### 5.4.1 ボランティアの推進

魅力化評価システムによると、本校生徒のボランティア活動への参加率が低いことがわかる。前述の通り、その原因は生徒が地域のボランティアの情報を入手できないためだと考え、校内ボランティアボードを制作した。総合的な探究の時間で関わった協育パートナーからボランティアを募ることで参加者は増加している。



※校内に設置したボランティアボード

また、校外ボランティアだけでなく、校内ボランティアの募集も始まっている。地域にボランティア募集の依頼を定期的に行うことで、「チャレンジしたい」と思った時にチャレンジできる環境を作る。

### 5.4.2 インターンシップ

ボランティアと同時に、インターンシップも募集する。邑南町内の企業団体から生徒の職場体験・インターンシップに対する要望が多いため、長期休暇を利用してインターンシップが可能な体制とする。これまで、総合的な探究の時間で職場体験を1日実施していたが、受け入れ先から「時間が短い」「数日間来てほしい」との要望があった。地域探究や進路探究にも時間をかける必要があるため、教育課程内ではなく、教育課程外＝コンソーシアムの取り組みとして、インターンシップを行うことにし、担任との面談の中で「インターンシップはどうか」などと声がけできるように校内での情報発信を促す。

### 5.4.3 島根県内外で行われるコンテストやイベントへの参加

令和4年度、TSK グループ基金さんいん未来縁人と地域・教育魅力化プラットフォームが主催する「SHIMANE みらい共創 CHALLENGE」に本校生徒が出演し、活動を行った。生徒はこうした教育的な機会に飛び込むことで、本校だけでは出会えない人や機会に出会い、成長する。ボランティアボードを活用した告知だけでなく、一人一人の思いを汲み取りながら、こうした機会に参加することを後押しできる環境を作りたい。

### 5.4.4 地域での経験を学びに変換するために…

ボランティアやインターンシップなど、学校管理外での活動が増えることが予想される。生徒の活動をそのままにするのではなく、学びに転換する機会やツールを整備することで、学校としても生徒の活

動を認知することができ、万が一の時の対応も可能となる。【地域での活動の後には、壁打ちになる】【年度末の振り返りの時期に、参加した活動一覧を提示し、身につけた姿勢や力を認知できるようにする】など組織的な対応にする。



## 5.5 コンテンツベースの教科横断プログラム

### 5.5.1 教材一覧

3年間の事業の中で、コンテンツベースによる教科横断プログラムを作成した。該当単元で活用できる内容であると同時に、「5.2.5 各学年のカリキュラム（1年生）」の探究テーマ選択でも活用できる。ただし、旧課程内容もあるので、取り扱いには注意が必要である。

| コンテンツ         | 実施時期  | 教科              |
|---------------|-------|-----------------|
| ・ 文化的衝突       | 1年1学期 | 英語・家庭           |
| ・ パラリンピックレガシー | 1年1学期 | 保健体育・家庭         |
| ・ 食糧危機        | 1年1学期 | 保健体育・家庭・公民・生物   |
| ・ 労働問題        | 1年2学期 | 保健体育・家庭・公民      |
| ・ 住居と地域の関係    | 1年3学期 | 家庭・地理・総合的な探究の時間 |
| ・ カーボンニュートラル  | 1年3学期 | 家庭・公民           |

(\*実施時期については実績を記載している)

### 5.5.2 教材（ワークシート）一覧

| コンテンツ | 文化的衝突：日本の常識、世界の非常識？       |                                       |
|-------|---------------------------|---------------------------------------|
| 教科単元  | 英語／English Communication1 | 「High school Life at Home and Abroad」 |
|       | 公民／現代社会                   | 「地域紛争と難民問題」                           |
|       | 家庭／家庭基礎                   | 「共に生きる」「共生社会を目指して」                    |
| 教材    |                           |                                       |

**総合的な探究の時間** 学際科目「日本の常識、世界の非常識？」 ( )組 ( )番 ( )名前 ( )

総合的な探究の時間では、知識を身につけるよりも、知識を活用する方法を学んでいます。どんな知識に活かす必要があるか、「考える力」を学んでいます。学習科目は、資料をまたぎ、皆さんの持つさまざまな知識や経験を活用して、答えのない問いについて考えることを目指します。

(1) 日本と海外の学校の違いを確かめよう (英語の教科書を見てみよう)

|                | 日本 | 海外 |
|----------------|----|----|
| 服装<br>Clothing |    |    |
| 学校行事<br>Event  |    |    |
| 掃除<br>Cleaning |    |    |

(1) 次の記事を読んでみよう。

人口減少が著しく若年労働者が減り、高齢化や人口減少の食い止めを図るため海外からの労働者が流入しているA国。その結果、A国の人口は増加し、高齢化や人口減少へ歯止めを掛けています。あなたは、そんなA国の学校の先生になりました。

入学してくる子供たちの中には、キリスト教徒の子供たちやイスラム教徒の特徴である「ヒジャブ」を着用する子供もいます。

ある日、イスラム教徒の保護者から、「イスラム教では、豚肉を食べるべきではないという戒律がある。アレルギー対応をしているように、給食では豚肉を使った料理を出さないでほしい」との要望を受けました。

日本国憲法上では、信教の自由が保証されており、日本に住む外国人にも適用されています。持続可能な開発目標 (SDGs) でも、多文化共生社会の実現が目標になっています。

しかし、日本の食文化「豚汁」や「とんこつラーメン」などを提供できないことは、学校給食法にある「我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること」に反することにもなります。豚肉は牛肉より安く、隠された給食費の中ではよく使われ、子供たちに人気のポークカレーも出せなくなるのも、他の子供や保護者の反感を買うかもしれません。

(2) 海外と日本の文化や生活習慣の衝突について、他にどのようなことが起きると思いますか？ (自国でも人口減少に伴い、今後海外から多くの人々が移住してくるかもしれません。)

イメージ写真①

出典: 市立豊中小学校の日本語教室 (2017年4月20日朝日新聞より)

イメージ写真②

プラザムを初のフェイションを注文するプラザム人 (2017年4月20日朝日新聞より)

(3) 本日の気づきを書いてみよう (感想、疑問、感じたことなど課題に書いてOKです)

【参考】世界三大宗教教徒数

|    | キリスト教 | イスラム教   | 仏教     |
|----|-------|---------|--------|
| 世界 | 24億人  | 18億人    | 5億人    |
| 日本 | 190万人 | 10万人*推計 | 8500万人 |

世界データは『自国事務プラチナ2017年版』、日本データは『文化庁文化庁統計調査 (令和元年度)』より

|       |                                     |                     |
|-------|-------------------------------------|---------------------|
| コンテンツ | パラリンピック：パラリンピックレガシー                 |                     |
| 教科単元  | 保健体育                                | 「オリビズムとオリビックムーブメント」 |
|       | 家庭／家庭基礎                             | 「共に生きる」「共生社会を目指して」  |
| 実施時期  | 1年1学期                               |                     |
| 教材    | ＊『I'mPOSSIBLE』サイトから、シッティングバレーの動画を活用 |                     |

総合的な探究の時間 学習科目「パラリンピックレガシー」 ( ) 組 ( ) 番 ( ) 名前 ( )

東京オリンピック・パラリンピック競技大会の開催について、関心が高いと思います。皆さんは準備すべき。それと申すまでもありませんが、さて、今回の学習単元のテーマは「パラリンピックのレガシー」です。パラリンピックの価値を醸成し、全ての人が豊かに暮らせる社会の実現を目指して学んでみましょう。

【1】パラリンピックは開催されるのだろうか？

| 自分の意見 | グループの意見 |
|-------|---------|
|       |         |

【パラリンピックムーブメント】  
 パラスポーツを通して発信される価値やその意義を通して世の中の  
 人に気づきを与え、 を作るための  
 社会変革を起こそうとするあらゆる活動

【パラリンピックの4つの価値】

|                          |                     |                |                              |
|--------------------------|---------------------|----------------|------------------------------|
| マイナスの感情に引き合い、暴言を飛ばすような発言 | 課題があっても、諦めず努力を続けること | 人の心を惹きつけ、魅了する力 | 競争心を認め、厳格な努力をすれば誰かが同じことを果たせる |
|--------------------------|---------------------|----------------|------------------------------|

【知ってみたい！】障がい者スポーツ総合国際競技大会  
 サッカーではW杯、陸上では世界陸上のように、障がい者スポーツ総合国際競技大会は、パラリンピックではありません。障がいによって、参加できる大会が異なります。

|       |                    |
|-------|--------------------|
| 身体障がい | 知的障がい              |
| 聴覚障がい | 身体不自由、切断、脳性麻痺、視覚、等 |

※一層障がいは、知的障がい者も対象

(1) パラリンピックの価値「公平」を通して、より良い社会を考えよう。

次は先生は、スポーツのルールを除くルールブックのような存在です。ある物、何などによってある人や事柄の人のから、パラリンピックをしないとか申し分もありません。パラリンピックの「公平」という価値に集って、ルールを守りながら競争するなどの厳格なルールを、障がいのある人も、そうでない人も、誰もが楽しめるパラリンピックを考えましょう。

【考えるポイント】  
 ・パラリンピックの価値は、どうしたら共有できるだろうか？  
 ・役に障がいがある人への価値をなくすためにどのようなルールにすればいいだろうか？  
 ・(公平)の価値が「障がい」をなくすこと  
 ・価値などは公平な正義をしようだろうか？

【問い】シッティングバレーボールは、役に障がいがあるという「バリア」によって、パラリンピックをしないという状況から生まれたスポーツです。スポーツだけではなく、暮らしの中にもバリアはあるかありません。では、障がいがある人へのバリアをなくすことは、他のバリアに対して障がいがある人も公平に楽しめるための、どのような厳格なルールが考えられるか？

【問い】「バリア」に関する社会的な課題の中には選挙権も関係しています。前回実施した「宗教」や「LGBTs」「高齢者」も同じような状況です。「自分の当たり前は当たり前ではない人たちがいる」という前提に立ち、排除ではなく、包摂できる人になってもらえと願っています。

【3】本日の気づきを書いてみよう (個人、グループ、各自のことなど自由に書いてください)

|       |                    |                          |
|-------|--------------------|--------------------------|
| コンテンツ | 食糧危機：未来の食卓を考えよう！   |                          |
| 教科単元  | 保健体育               | 「食事と健康」                  |
|       | 家庭／家庭基礎            | 「これからの食生活」               |
|       | 生物／生物基礎            | 「生命活動とエネルギー」「生物の多様性と生態系」 |
|       | 公民／現代社会            | 「市場経済のしくみ」               |
| 教材    | ＊知識構成型ジグソー法による授業構成 |                          |

教科構成 2020年プログラム <家庭×保健×生物×公民> 未来の食卓を考えよう！ 年 組 番 氏 名

今日考えて欲しいこと 今から30年後、2050年の食卓は、何が並んでいるだろうか？ 今、私たちは何をすべきだろうか？

(1) 皆さんの好きな食べ物は何ですか？

(2) 2050年の食卓には、好きな食べ物も並んでいるでしょうか？  
 並んでいる (食べられる) /  並んでいない (食べられない)

(3) 2050年には、どんなことが起きているでしょうか？

2020年の世界の人口： 約 75億人  
 2050年の世界の人口： 約 100億人  
 2020年の日本の人口： 約 1.25億人  
 2050年の日本の人口： 約 1億人

●このまま人口が増え続けると、何が起きるだろうか？  
 食糧に対する 需要 > 供給 となるので、  
 食糧価格が ( ) 変動したため、食糧の価格は ( ) する。

これは2050年に起こると予測されている「食糧危機」です。

(4) 未来の食卓、未来の食生活がどのように変化するかを予想しよう。

資料1：肉類の消費 資料2：魚介類の消費 資料3：野菜・果物の消費

(グループの意見) 大胆予想！未来の食卓はこうなる！

(5) 私たちが、今できることをプレストしてみよう！  
 このような未来になる前段で /  このような未来にさせないために ]  
 こんなことしたらいいかも！

●本日の授業の感想や意見、また、自分自身でどのような行動をとりたいかを書いてみよう

■「食糧危機」を回避しましょう！  
 食糧危機を回避するために「食料」を確保することが重要です。食料を確保するためには、食料の生産を増やす必要があります。食料の生産を増やすためには、食料の生産技術を向上させる必要があります。食料の生産技術を向上させるためには、食料の生産技術の研究開発を行う必要があります。食料の生産技術の研究開発を行うためには、食料の生産技術の研究開発を行う必要があります。



|       |                                   |                           |
|-------|-----------------------------------|---------------------------|
| コンテンツ | カーボンニュートラル：ゼロカーボンシティでの暮らしをイメージしよう |                           |
| 教科単元  | 家庭／家庭基礎                           | 「これからの住生活」                |
|       | 公民／現代社会                           | 「わたしたちの生きる社会」「環境保全と循環型社会」 |
| 教材    | ＊ 島根県立大学と連携                       |                           |

公民★家庭★新編 **ゼロカーボンシティでの暮らしをイメージしよう** ( ) 組 ( ) 番 ( ) 名 ( )

(1) 皆さんの暮らしにとって、「なくてはならないもの」ベスト5は何ですか？

| 生活のために、なくてはならない | 精神的に、なくてはならない |
|-----------------|---------------|
| 1               |               |
| 2               |               |
| 3               |               |
| 4               |               |
| 5               |               |

(2) 「なくてはならないもの」で、CO2を排出しているものについてみよう。

■ゼロカーボンシティを実現させるために必要なことはなんでしょう？

|                  |      |
|------------------|------|
| ①CO2の <b>排出量</b> | を減らす |
| ②CO2の <b>吸収量</b> | を増やす |

(3) ①、②のアイデアをブレインストーミングしよう。

| ①のアイデア | ②のアイデア |
|--------|--------|
|        |        |
|        |        |
|        |        |
|        |        |
|        |        |

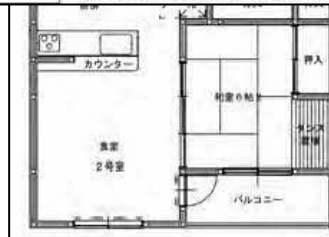
(4) ゼロカーボンシティに暮らした場合、どのような暮らしに切り替わるでしょうか？  
下イラストの「カーボンシティ」での暮らしを参考に、本来の町営住宅や学生生活の生活がどうなるのかを考えてみよう。

■考える際のポイント

- ・ 家の大きさはどうする？ / 家の高さはどうする？ (単位：半段を1)
- ・ 移動 (登下校) はどうする？
- ・ みんなにとっての「なくてはならないもの」はどうする？

MEMO

(5) 付箋に書き出して、平面図に貼り付けよう。  
例) 「窓際デスク」を机に置き、壁に紙を貼りに見せ付ける





## 6. 残された課題と今後の方針

### 6.1 教科横断の模索

現行の協育カリキュラムでは、教科教育との関係性が薄く、地域での実践と学問的領域との融合が図られていない。教科の内容を学ぶ意義を感じる上でも、教科横断は有効な手段といえる。

本事業では、1年目・2年目はコンテンツベースの教科横断の授業プログラムを作成した。教科を横断するテーマ（例えば『食』や『労働』）を教科単元から抽出し、教科横断の授業をパッケージとして形成することで、教科によっては単元計画の「導入」段階や「発展」段階で実施できるパッケージを作ることができた。ところが、生徒の学びを評価することや授業単位の関係から、教科横断をする上での調整コストが大きくなり、翌年度へ引き継ぎは難しく、学校全体の評価のシステムへの着手が必要となることがわかった。

そのため、最終年度は教科横断の方針を変え、総合的な探究の時間を基軸に、各教科で横断ができる・関連できるようにするため、総合的な探究の時間の年間計画を共有するだけでなく、教員研修として各教科の単元構成を共有する場を作った。結果として、国語「話すこと、聞くこと」との連携によって、各教科の探究的な学びやスキル習得とその発展として総合的な探究の時間を活用する場面が見られた。また、各教員同士が教科の枠を超えて評価について実践事例を共有するほか、「今、総合的な探究の時間では何をしていますか？」と尋ねてくることが増え、教科横断をする上での教員同士の共有の土台は形成されたと言える。



また、総合的な探究の時間の特に地域での探究活動の場面においては、学校全体で関わることで教科横断の意味で効果的であると考えます。最終年度は、生徒の発表資料を校内に掲示し、担当教員以外の教員も取り組みを理解・助言できる工夫を行った。教員だけでなく、他学科の生徒も活動を知ることができ、1年生の探究でも思考プロセスや実践について参考にする生徒もいた。

さらに、地域未来探究発表会の発表の様子を動画配信かつアーカイブ化したため、観覧した教員から「もっとこうしたらいい」という意見をもらうことができた。

今後は総合的な探究の時間のような、学びのプロセスを可視化しやすい教科においては、情報を公開することで他教科からフィードバックを得ることが期待できると考える。

#### 《次年度への引き継ぎ》

- ・総合的な探究の時間の年間計画を前年度には提示し、伴走のやり方などの研修を行う
- ・生徒の学習成果物（プロセス）を明示し、全校からフィードバックをもらう仕組みを取る



## 6.2 高大連携の推進

現行の協育カリキュラムは、矢上高校内部ないしは邑南町内で完結する形になっている。しかし、生徒の学びの領域に限界はないため、学ぶ意欲を高める工夫が必要である。町内には高等教育機関が存在しないため、進路先の検討を考える上でも、島根県内の大学（国立大学法人島根大学及び島根県立大学）との連携を強化することで、探究的な学びの先となるゴールを見ることが可能となる。

最終年度、島根県立大学との連携を模索し、大学の授業の一環で大学生が邑南町に来町する時期と調整することを考えたが、日程の都合上、大学生と高校生との交流機会を作ることができなかった。一方、邑南町の井原地区を対象にした、作野教授（カリキュラム開発等専門家）が実施している大学生と地域住民のフィールドワークの企画には、本校生徒も参加した。

今後は、大学との教育課程内での連携を模索するためにも、大学が関わる教育課程外での取り組みへの参加（ボランティア）を増やせるように検討する必要がある。

研修旅行では、立命館大学食マネジメント学部を訪れ、教授や大学生、大学院生に対して活動の中間発表の機会を作り、活動へのフィードバックを得ることができた。比較的年齢の近い大学生に自分たちの活動を評価してもらうことで活動に対して自信がついたと言える。

今後はオンライン等も使用しながら、年齢の近い卒業生と連携をとり、日頃の探究学習の相談に乗ってもらう仕組みを検討する。



### 《次年度への引き継ぎ》

- ・大学生や専門学校生等による伴走（オンライン含む）が可能な体制を構築する

## 6.3 自走体制の構築

協育カリキュラムが本校の特色のある取り組みとして継続するためには、担当者だけではなく学校の文化（ブランド）として持続していく必要がある。本事業が終了することにより、やってきたことができなくなるのではなく、形は変わっても自走することが重要である。その意味では、自走体制には次の4点が必要であると考えます。

### （1）自走する運営

「3.4 生徒の変容」では、教育課程内で協育カリキュラムを実行すると「地域の課題の解決方法について考える」生徒の割合は65%を超えることがわかる。授業の中でカリキュラムを実行する以前と比べると明らかな向上を示している。本カリキュラムを持続可能な運営体制に変化させなければならない。本事業において最低限必要な資金は、地域に出るための旅費、試行錯誤するための費用、地域での活動の

ための保険、協育パートナー含む協力者への謝金である。これら最低限必要な活動費用について景気変動に影響しない体制を構築する必要がある。

#### (2) 自走する教員

本事業では、コンソーシアムの構築や教材の制作を成果物として取り組んで、現行の協育カリキュラムを制作した。校内体制においては最終年度、体制変更を行うことで一定の成果を出すことができたものの、事務局である魅力化推進センターの舵取りが重要であった。成果物としての協育カリキュラムを、魅力化推進センターが先導しなくとも利用できる環境を作る必要がある。

#### (3) 自走する生徒

協育カリキュラムの課題は、教育課程外の取り組みが不明確であることである。また、そもそも探究は、授業によって促されるものではなく、生徒が探究したいと感じた時に探究するものである。生徒の中には地域探究活動（授業）をきっかけに、ボランティアに参加、新たに部活動や同好会を起こす生徒、さらに地域課題解決をビジネスに起業する生徒が現れる可能性がある。こうした生徒の自主的な探究に対する校内での理解や支援する制度を作る必要がある。

#### (4) 自走する地域

教育課程では、学習者主体のカリキュラム構成が必要であるため、生徒の探究的な取り組みは単年度で終了になりがちである。しかし、3年間の振り返りの中では、「継続性」を強く希望する地域や協育パートナーの意見が多い。授業の中では限界があるため、どうしても(3)自走する生徒の登場を期待するしかない。部活動や同好会、生徒会といった校内での組織的な取り組みへ派生させる環境を作るだけでなく、地域の中でも生徒の探究のバトンを受け取り、継続性を担保し、ボランティア等で町内の小・中学生や本校生徒、本校以外の生徒を巻き込むことも重要である。

以上の4点を踏まえ、真の意味での地域と学校の協育カリキュラムの仕組みを形成する必要がある。

#### 《次年度への引き継ぎ》

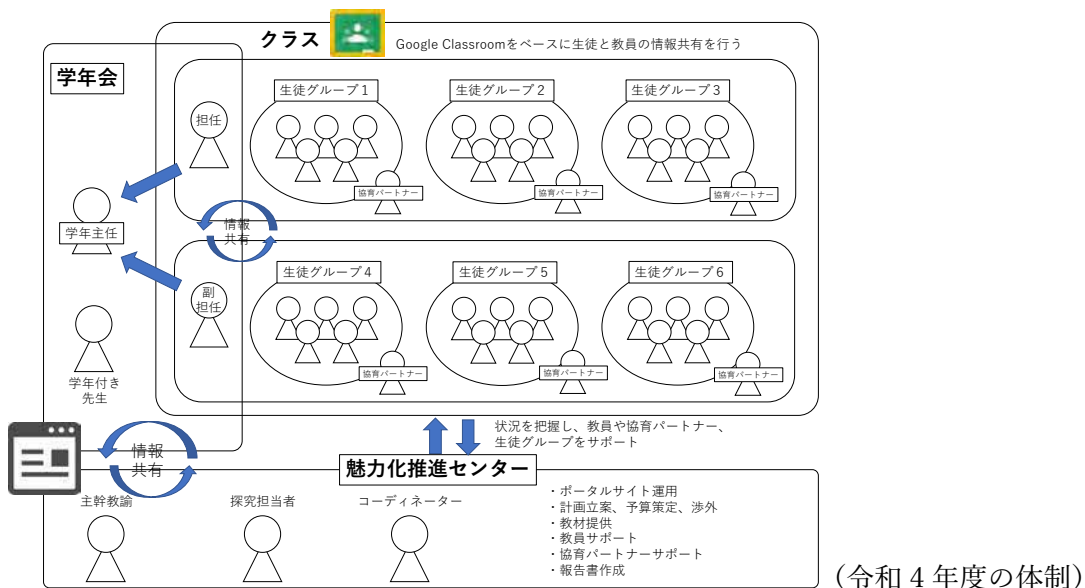
- ・ 持続可能な協育カリキュラムの実施のための財源を確保する
- ・ 地域で生徒が活動できる場を計画する、あるいは組織を作る

### 6.4 校内体制の再構築

協育カリキュラムを持続可能な形で運営するためには、校内体制を再構築する必要がある。生徒の主体的な活動を支えるためには、各チームに伴走する大人が必要だと判断し、本事業2年目には、地域の方を「協育パートナー」として認定した。その結果、地域と生徒がつながり、地域での実践活動が増加した。しかし、生徒の活動についての担任・副担任による進捗把握が困難となった。

そこで、最終年度は、協育パートナーによる生徒チームの伴走は継続し、担任・副担任は各クラス役割分担してそれぞれ生徒を伴走する体制とした。また、魅力化推進センターを協育パートナーとの調整やスケジュール調整を行う事務局として機能させることにした。さらに、協育パートナーにも Google

Classroom のアカウントを付与し、教員や生徒がそのやり取りを見える環境での情報共有や連絡をとる仕組みとした。



機械的に担任・副担任で生徒の伴走を依頼することで進路指導での活用が期待できる一方で、生徒の探究についての学問的な伴走は難しい。生徒の探究的な取り組みが明らかになったタイミングで関係する教科の教員との連携を視野に入れていきたい。そのことで、教員の伴走力を養う機会が生まれ、教科から総合的な探究の時間、総合的な探究の時間から教科という往還が生まれることを期待したい。

《次年度への引き継ぎ》

- ・教科と総合探究を往還するプログラムを整備し、多くの教員が関わるようにする

## 6.5 関係者からのメッセージ

### ○清國運営指導委員

3年間を振り返ると、本事業の最大の目的は「探究を『探究する』こと」であったのだろう。その意味で、島根県立矢上高等学校の取組は一定の到達点に辿り着いたと考えている。「探究を『探究する』こと」を正確に客観的に評価するのは難しい。なぜなら探究は平坦な道のりではなく、進めば進むほど変容し成長していくからだ。初年度の悩みは形を変え、さらに深い悩みへと導かれたように思う。それでいいのだ。

探究は道なき道を進み、その後に道ができる過程が面白い。整備された道を進むのは楽だが楽しくない。それは従来の教科学習と比べると明らかだ。あらかじめ準備された正解に辿り着くことが求められる世界では、自分独自の世界は生まれづらい。ただ、教科学習は教員としては教えるにせよ寄り添うにせよ安心だ。生徒や保護者も答え合わせのできる教科学習の方が不安は少ないかも知れない。

実社会はそもそも唯一絶対の正解が準備されているわけではない。多くの人が試行錯誤をしながら結果や成果を生み出していだけだ。完成度のレベルはいろいろとあるだろうが、探究プロセスから導かれた貴重な果実である。それらの果実はほとんどの場合、工夫や改善の余地に満ちあふれている。だから人々を引きつけるのではないか、さらなる探究に導くのではないかと私は考える。

地域に目を向けると、持続可能性がどんどん怪しくなっている。手つかずの課題も山積したままである。「村を捨てる学力」とは東井義雄の言葉であるが、「村を育てる学力」と対比される。「せまい日本そんなに急いでどこへ行く」は1973（昭和48）年の交通安全標語（総理大臣賞受賞）であるが、日本があるからこそ私たちの暮らすグローバル社会である。この時代をどう生きるかを真剣に考え始めなければならない。

矢上高校の取組からも分かるように、地域は学びのパートナーである。高校生の学びが中心にはあるが、大人の学びの貴重な機会でもある。高校生の学びが、学校の学びが、自己完結から飛び出ようとしている。コンソーシアムを形成して、学校を核とした地域の学びのコミュニティが立ち上がった。この財産が雲散霧消しないよう、しかしながら財産を守ることのみが目的化しないよう、この取組を続けていかなければならない。

### ○馬庭運営指導委員

「地域との連携でのしくじり」・「テーマ設定のしくじり」・「校内体制でのしくじり」・「伴走のしくじり」・「探究活動でのしくじり」。

これは、令和5年1月27日に開かれた「令和4年度矢上高校未来フォーラム／文科省事業シンポジウム」でのパネルディスカッション「矢上高校しくじりパネル」において提供された5つのテーマである。この3年間の指定事業を総括し、そこでの「しくじり」をさらけ出すことで、フォーラム参加者に今後の参考にしてもらいたい、という目的で設定されたものであった。

「しくじり」と銘打ってはいるが、当事業の管理機関の担当として、かつ、県内の探究学習を推進していく立場として言えるのは、この「しくじり」は、地域と協働した探究学習を進めようとする多くの学校にとっての「あるある」であり「壁」であるということだ。例えば、「探究学習を担当する分掌以外の教員の関わりを、より積極的なものにするにはどうすればいいのか」、「コーディネーターは何をどこまで担うのか」といった体制や役割の問題。また、「生徒の興味関心と主体性に基づいて探究テ

マを設定すべきだが、地域の課題や人々の思いはどこまで反映させるのか」、「教科での学びと総合的な探究の時間の学びとをどのように結びつけるのか」といった課題設定等に関わる問題。あるいは、「教科書もワークシートもない中で、何をよりどころに授業を進めるとよいのか」といった教材の問題など、どの学校も悩みながら試行錯誤を繰り返している。

今年度で指定事業は終了するが、「しくじり」や「あるある」の解決に向けて取り組んできた先進校として、今後も、積極的な情報提供や他地域も交えた対話の場の設定などを継続させてほしいと願っている。特に、この3年間に開発された教材（探究ハンドブック等）は、他校にとっても参考となる優れたものと考えており、さらに更新され活用されていくことを期待している。

現在、島根県では全ての県立高校に高校魅力化コンソーシアムが構築されているが、地域との協働による高校魅力化については、矢上高校はすでに10年以上の実績がある。その実績が、この事業に際して、例えば「協育パートナー」という形となって生きてきたと思う。矢上高校の取組を3年間見続けて感じたのは、地域と学校とが時間をかけ、地道に信頼関係を構築していくこと、常によりよい授業をつくろうとする意識を持ち続けること、「しくじってもよい」から、とにかく試してみることの大切さである。これは、生徒や教職員が地域協働や探究学習に臨む際に大切な姿勢でもある。

## ○白石運営指導委員

高校が地域と協働するにあたって

### 1. 所感、感想

矢上高校における魅力化の取り組みについて、運営指導委員として関わった範囲での所感・感想について記述します。

矢上高校における魅力化の中で特徴的だと感じるのは総合的な探究の時間において、地域との連携を強く打ち出している点です。地域の方や町内企業経営者の方々を、生徒たちの伴走役として「協育パートナー」として認定・移植して公式に位置づけを明確にしている点は協育パートナーに認定された方もやりがい等を感じられたり、校内行事に優先して情報提供されたりがあり、高校に係わることのメリットを感じられる仕組みとなっている点が効果的であると考えられます。

また、起業探究においては、邑南町のひとつの特徴となっている地域おこし協力隊出身者をはじめとして起業家が多いことなど地域性も踏まえた科目になっている点も評価できると思います。

邑南町の各地区でまちづくり事業に携わっている方たちにとっては、矢上高校は「連携したいパートナー」という認識が強い一方で、どのように連携できるのかわからない、というジレンマを感じているところはあると感じます。地域が求める連携に対して、高校が開いていくことで、これまでにない地域との相乗効果が期待できると考えます。地域で暮らし、働き、活躍する大人の姿は必ずしも高校生に普段から見えているものではありません。その姿を、探究等を通じて、地域の姿、大人の姿を垣間見ることは高校生の成長や進路の一助になると感じます。

### 2. 提案、提言

●“地域”との連携のあり方について



・協育パートナーという制度、仕組みを試行しており、協育パートナーの伴走支援の効果は確認できたと思います。

・他方、協育パートナーと学校との連携、協育パートナーと生徒とのコミュニケーション上の課題（コミュニケーションの頻度、コミュニケーション上のマナー等）は残されていると感じられます。

・課題は残しつつも、「協育パートナー」という仕組みはまだ2年ほどしか試行しておらず、もう少し継続していきながらより良い仕組みへとブラッシュアップすることが重要と考えます。

・コミュニケーションの頻度は、授業外でのコミュニケーションの場をいかに作るかが課題ですが、Google Classroom というプラットフォームを使うとしたらその場を作る役割が必要と考えます（教員またはコーディネーター？）。

・コミュニケーションマナーは予めビジネスマナー等を生徒に伝える、ということが必要と考えます。また協育パートナー側にも生徒への伝え方等に関する配慮等を伝えることも要検討と考えます。

・学校と協育パートナーとの連携・情報共有等は、実情としてはハードルもありますが、期間中に数回程度、協育パートナーと担任・副担任、総探担当教員等との連携会議などを意識的に組み込むなどが想定されます。

#### ○日高運営指導委員

矢上高校の歴史は、常に地域と共にある。過疎化、少子化が急速に進む中であって、県立高校が地域に存在することの重要性は、町民の多くが共有している。本町では、平成17年に「矢上高校あり方検討委員会」が発足して以来、高校の魅力化づくりを町政の重点課題と位置づけ、他市町に先駆けて専従の職員を配置するなど取り組みを強化してきた。

この間、高校を取り巻く状況が大きく変化する中で、「将来ビジョン」を2回にわたって策定いただいた。関係者の皆様のご努力によって、生徒確保対策に重点を置いた第1期ビジョンから、地域との協働、連携の強化も意識された第2期ビジョンに移行し、「矢上高校教育振興会」も「矢上高校と地域の未来をつくる会」へと一層地域との連携を重視した形へと進化している。

さて、「総合的な学習からの脱却」～「探究活動」ということについて、恥ずかしながら何もわからずに令和2年度から3年間、本事業に関わらせていただいた。このような状況ではあったが、様々な地域課題を高校生の視点からの確にとらえられていることには新鮮な驚きを感じることもあり、学習の成果を何とか形にしようという生徒の皆さんの熱意や積極性にも感銘を受けた。一方、コロナ禍にあって授業カリキュラムの構成、地域の方々との調整等手探りの中で進められた職員の皆さんにも敬意を表したい。

そして、子どもたちのためになることならと手弁当で協力いただいている地域の皆さんの生徒に対する熱く深い愛情がこれらの活動を支えていると再認識している。とりわけ青年層の関りが多いことは地域との連携の可能性が無限にあることを示していると思う。

生徒が地域社会との関りをもって社会人として成長していくことの重要性は益々高まると思うし、地域住民の多くが生徒との関りの機会を楽しみにしていると感じている。本事業の積み重ねに大いに期待している。

○作野カリキュラム開発等専門家

“小さいことはいいことだ！”

今から10年前の2013年、「矢上高校生が語る未来フォーラム」がはじめて開催された。矢上高校では、この当時から「地域の未来」を考えることが「自分の未来」につながると考え、教育課程の一環として地域課題を研究し、邑南町への提言を行っていた。邑南町も生徒たちの提案をすぐに具体化し、邑南町マスコットキャラクター「オオナン・ショウ」の誕生、邑南野菜のブランド化、矢上駅の改修など、地域課題の解決、地域資源の活用、地域情報の発信を積極的に行ってきた。

2015年、「矢上高校将来ビジョン」が策定され、ビジョンを確実に実行していくために、矢上高校職員室内に「矢上高校魅力化推進センター」が設置された。また、高校、行政、地域の関係者が一堂に会してビジョンの推進と進捗管理を行う「矢上高校魅力化推進本部会議」も設置された。今日、全国各地で展開している「コンソーシアム」の先駆けとなったとみてよいだろう。

2020年、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」に採択された。その成果については、本報告書において入念に記載されている。このように、矢上高校では10年以上前から、生徒と地域が協働することにより、地域の課題解決・魅力向上と、生徒の「学び」「育ち」を一体的に行ってきた。矢上高校が全国をリードするほどにまで成長できた要因は、1学年あたり普通科2クラス、産業技術科1クラスの小規模高校だからこそであろう。

今後は、矢上高校が高等学校教育の場に限定されることなく、地域のみんなが集える場になることを期待したい。すなわち、矢上高校が邑南町の中央公民館の役割を担ったり、地域商社の本社であったり、社会福祉協議会の本部であったりして欲しい。つまり、生徒が地域に出かけるとともに、地域の人や組織が「あたりまえ」に学校に出入りすることを常態化して欲しい。これからの時代のキーワードは「ごちゃまぜ」であると考えます。生徒たちは、同じ年齢集団で成長するとともに、異なる世代、異なる属性の中で切磋琢磨することが期待される。このような学習環境は、矢上高校や邑南町が小規模だから実現可能である。今後は、「小さいことはいいことだ！」を体現し、全国に発信して頂きたい。

## 7. 報道記録

### 7.1 新聞掲載等

#### 《新聞記事》

| 日付             | 出所     | 記事タイトル                   |
|----------------|--------|--------------------------|
| 2022.6.15 (水)  | 山陰中央新報 | 邑南活性化したい                 |
| 2022.11.12 (土) | 山陰中央新報 | 出羽産サツマイモ矢上高生が菓子に         |
| 2022.11.19 (水) | 中国新聞   | 「手作り」実感増す輝き              |
| 2022.12.22 (木) | 山陰中央新報 | 角寿司 若者へ PR               |
| 2023.1.18 (水)  | 山陰中央新報 | 22年度文科大臣表彰 優良公民館に井原・鹿島など |
| 2023.1.28 (土)  | 山陰中央新報 | 仮想空間で脱炭素化表現              |
| 2023.1.28 (土)  | 中国新聞   | 矢上高生「角寿司作る習慣を」           |
| 2023.3.1 (水)   | 中国新聞   | 郷土料理作りや講演会 邑南で社会教育フェス    |

#### 《雑誌・広報・書籍類》

| 日付            | 出所      | 記事タイトル                   |
|---------------|---------|--------------------------|
| 2023.1.16 (木) | 大正大学出版会 | 地域が後押しする地域留学自身と生きる力を育む学校 |
| 2023.2月号      | 広報おおなん  | 矢上高の生徒が活動発表              |



2022.6.15 (水) 山陰中央新報



2022.11.12 (土) 山陰中央新報



2022.12.22 (木) 山陰中央新報



2023.1.18 (水) 山陰中央新報



2023.1.18(水)山陰中央新報



令和4年度 島根県立矢上高等学校

文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」活動報告書  
おおなん協育プロジェクト～邑南町総がかり！協働で育む“協育”カリキュラムの開発～

発行日 令和5年3月15日

編集・発行 島根県立矢上高等学校

矢上高校と地域の未来をつくる会（コンソーシアム）

魅力化推進センター

〒696-0198 島根県邑智郡邑南町矢上3921

TEL 0855-95-1105（代表）

FAX 0855-95-1995

印刷 武永印刷株式会社